

第 12 回文化資源学フォーラム
「地図×社会×未来」
報告書

主催

東京大学大学院人文社会系研究科
文化資源学研究室

協力

国土地理院、佐野正弘、(株)人文社
(株)ゼンリン (五十音順、敬称略)

後援

文化資源学会

目次

I	はじめに	・・・ 2
i	文化資源学研究室とは・・・ 2	
ii	「文化資源学フォーラム」について・・・ 2	
iii	本年度の実行委員会・・・ 3	
II	フォーラム開催までの道のり	・・・ 4
i	スケジュール・・・ 4	
ii	テーマに対する学生の思考の変遷・・・ 5	
iii	具体的な調査報告 1：文献購読・・・ 8	
iv	具体的な調査報告 2：インタビュー・・・ 14	
v	申込状況と当日の受付数・・・ 16	
III	フォーラム当日の報告	・・・ 18
i	開会挨拶・・・ 18	
ii	学生発表・・・ 19	
iii	柴崎亮介氏講演・・・ 22	
iv	鈴木純子氏講演・・・ 26	
v	尾関憲一氏講演・・・ 28	
vi	パネルディスカッション・質疑応答・・・ 31	
vii	閉会挨拶・・・ 42	
IV	アンケート報告	・・・ 43
V	まとめ	・・・ 49
i	総括・・・ 49	
ii	編集後記・・・ 51	

I. はじめに

i. 文化資源学研究室とは

文化資源学研究室 (Cultural Resources Studies) は、東京大学大学院人文社会科学系研究科に所属する研究専攻であり、文化経営学・形態資料学・文字資料学 (文書学・文献学) の三つの専門分野を有する。「文化資源」という語は、2002年に設立された文化資源学会 (The Association for the Study of Cultural Resources) 設立趣意書において、「ある時代の社会と文化を知るための手がかりとなる貴重な資料の総体」と定義されている。その対象は、既存の学問領域において芸術作品ないし文化財と呼ばれてきたものに留まらない。あらゆる種類の「かたち」を持つ資料 (形態資料)、「ことば」で書かれた資料 (文字資料)、そして、それらを支えるメディアやシステムのあり方それ自体も、文化資源学の研究対象となりうる。さらに、これらの資料体が生み出す文化を、社会の中でいかに位置づけるかを考えること (文化経営)、以上の三領域が、文化資源学を支える三本の柱となっている。

本研究室では、外国人留学生および社会人学生を数多く受け入れており、各学年を構成する学生の国籍・年齢層・経歴はさまざまである。学生各人には、文化資源学という比較的新しい学問の方法論の確立に、積極的に携わっていくことが求められている。

ii. 「文化資源学フォーラム」について

文化資源学フォーラムとは、毎年4月に入学する修士課程1年の学生、および博士課程1年に新規に入学した学生を実行委員会として、約1年間をかけて企画される研究室主催行事である。同研究室の教育プログラムの一環をなし、学生が主体となって実施することで、イベント運営に関わる業務を実地に経験する機会が与えられる。また同時に、企画のディスカッションを通じて、文化資源学という学問の方法論を各人が考え、共有していくことが、フォーラム開催のもう一つの目的である。

題材および表現形態は自由であり、過去には銭湯・本・仏教文化等の多様なテーマが選ばれ、また、講演・展示・パネルディスカッション等のさまざまな手法が試みられてきた。以下に、これまでの文化資源学フォーラムの一覧を掲載する。

第1回文化資源学フォーラム (2001年度)

「文化をつくる、人をつくる：インターンシップとリカレント教育の現在」

第2回文化資源学フォーラム (2002年度)

「記憶の再生：遺跡・史跡のマネジメント」

第3回文化資源学フォーラム (2003年度)

「関東大震災と記録映画：都市の死と再生」

第4回文化資源学フォーラム (2004年度)

「文化経営を考える：オーケストラの改革・ミュージアムの未来」

- 第5回文化資源学フォーラム（2005年度）
「廃校の可能性—芸術創造の拠点として—」
- 第6回文化資源学フォーラム（2006年度）
「社会と芸術の結び目—アウトリーチ活動のこれから—」
- 第7回文化資源学フォーラム（2007年度）
「1000円パトロン時代—ファンによる芸術支援の現状と課題—」
- 第8回文化資源学フォーラム（2008年度）
「つくる、えらぶ、のこす、こわす—高度経済成長期の東京景観考—」
- 第9回文化資源学フォーラム（2009年度）
「めぐりゆくまなざし—発見され続ける銭湯—」
- 第10回文化資源学フォーラム（2010年度）
「『書棚再考』—本の集積から生まれるもの—」
- 第11回文化資源学フォーラム（2011年度）
「#寺カルチャー—仏教趣味のいまを視る—」

第12回文化資源学フォーラム「地図×社会×未来—わたしたちの地図を探しにいこう—」（2012年度）においては、「地図」を核として、三人のゲストをお招きし、講演とパネルディスカッションの形式でフォーラムを行った。

iii. 本年度の実行委員会

本年度の実行委員会は、修士課程1年の学生7名と、博士課程1年の学生1名の、計8名により構成される。

国籍（日本・ブラジル・内モンゴル自治区）、経歴（本学学部からの進学者、他大学からの進学者、社会人経験者）、そして研究における専門分野もそれぞれに異なる8人の委員が、各自の関心を持ちより、文化資源学フォーラムとして実施するにふさわしいテーマの選定に当たった。「地図」という対象について、楽しみのために眺めることを好む者から、ほとんど使った経験のない者までさまざまであったが、フォーラムの企画運営を通じて地図そのものへの知識を深めると同時に、「地図」を切り口として、文化資源学という学問の方法論自体についての知見を得ることとなった。

文化経営学専門分野

- ・岡村 万里絵 OKAMURA Marie (M1)
- ・志田 康宏 SHIDA Yasuhiro (M1)
- ・ボルジギン シナ BORJIGIN Shinee (M1)
- ・ペルシチ マルコス PERSICI Marcos (M1)
- ・清水 雅行 SHIMIZU Masayuki (M1)

形態資料学専門分野

- ・大西 美緒 ONISHI Mio (M1)
- ・春谷 美帆 HARUTANI Miho (M1)

文字資料学専門分野

・寺尾 美保 TERAO Miho (D1)

II. フォーラム開催までの道のり

本章では、昨年度を通じて学生が取り組んだ第 12 回文化資源学フォーラム開催までの活動を示したい。以下、全体のスケジュール、テーマに対する学生の志向の変遷を示した後、具体的な調査報告として夏に行った文献講読とそれに続くインタビューについてまとめた。

i. スケジュール

今回のフォーラムでは、テーマの選定に 5 月からの 4 か月間を費やした。当初挙げられたいくつかのテーマについて、随時調査・報告を行いつつ、7 月に「地図」を題材として扱うことを決定した。7 月～9 月の夏期休暇の期間に、文献講読やインタビューを通じて「地図」に関わる基本的な知識を補強し、続いて、企画全体の構想を練る作業に移った。

これらの議論の結果を元に、10 月に企画書を作成し、これを用いてゲストの方々への出演依頼を行った。11 月～12 月にかけて、出演許諾を頂いたゲストの方々との打合せの機会を設け、フォーラムの構想および依頼内容について直接ご説明申し上げた。12 月には、ポスター・チラシの発送、ウェブサイトの開設を行い、12 月末よりウェブサイト上にて参加申込の受付を開始した。1 月には、夏期のインタビューにおいてお世話になったインタビュアーの方々に、お礼とご報告を兼ねた面会を行った。1 月～2 月にかけては、本番に向けての最終的な作業を進めると同時に、学生発表に向けてフォーラムの企画意図を再整理し、来場者に分かりやすく伝える方策を検討した。2 月中の三度のリハーサルを経て、2013 年 2 月 16 日（土）に無事フォーラムが開催された後、3 月中には本報告書の作成作業を各自分担して行った。

フォーラム開催に向けての事務的な作業については、下記の通り複数のセクションで分担して実行した。詳細は表 1 を参照のこと。

- 1) 本部：フォーラム全体の企画・運営に関わる最終的な決定を行う。企画の内容面については総合責任者が、運営上の実務については進捗管理責任者が、それぞれ担当した。
- 2) 会場運営：フォーラム当日の会場運営に関わる手配・PC・録音機器等の機材の進行計画および実操作は機材責任者が、フォーラム会場・講師控室等の会場手配は施設責任者が、当日の記録全般および機材責任者の補佐については記録担当者が、それぞれ担当した。
- 3) 広報・受付：ポスター・チラシ・Twitter・Facebook・ウェブサイト等の広報メディアの手配・稼働を行う。併せて、当日の司会進行を進行責任者が、当日の来場者対応を受付責任者が、予算の作成および収支管理を会計担当者が、それぞれ担当した。
- 4) (別働) 接待班：三名のゲストそれぞれに対する連絡および接待を行う。
- 5) (別働) 進行班：学生発表に向けての素案作成および発表者補佐を行う。

部門	①本部		②会場運営		
担当者	志田康宏	大西美緒	ペルシチ・マルコス	ボルジギン・シナ	寺尾美保
役職	総合責任者	進捗管理責任者	機材責任者	施設責任者	記録担当者
業務内容					
2012年10月	企画書作成統括	ゲストへの協力依頼 企画書送付	フォーラム会場手配		
2012年11月	パネルディスカッション タイトル提示	ゲスト打合せ日程調整	ランチミーティング会場検討		
2012年12月	ゲスト打合せ	インタビュー挨拶 日程調整	ポスター・チラシ発送		
2013年1月	学生発表構想提示 インタビュー挨拶	イメージ画像借用手配	機材借用手続 ランチミーティング・懇親会会場手配		
2013年2月	パネルディスカッション 草稿作成 イメージ映像作成	マニュアル作成 リハーサル進行表作成	機材進行表作成、会場配置表作成 備品購入・借用手続、飲食物手配		
フォーラム当日	コーディネーター	タイムキーパー	機材担当	会場設営担当	機材補佐
2013年3月	御礼状発送、報告書作成				
部門	③広報・受付			④接待班	⑤進行班
担当者	春谷美帆	岡村万里絵	清水雅行	志田、寺尾、春谷	志田、マルコス 岡村、大西
役職	進行担当者	受付責任者	会計担当者		
業務内容					
2012年10月	外注先検討、予算提示				
2012年11月	ポスター・チラシデザイナー依頼 ポスター・チラシ送付先リスト作成				
2012年12月	ポスター・チラシデザイン発注、ウェブサイト発注 Twitter、Facebook開設				
2013年1月	研究室・学会ML告知 申込対応			リマインドメール	
2013年2月	アンケート作成、配布資料印刷 司会原稿作成			配布資料收受	学生発表原稿作成 視覚資料作成
フォーラム当日	司会	受付担当	受付担当	ゲスト担当	
2013年3月	御礼状発送、報告書作成				

表 1. 作業分担詳細表

ii. テーマに対する学生の思考の変遷

フォーラムのテーマについてのミーティングは 2012 年 5 月から始め、メンバーの様々な関心を『祭り』、『伝える／記録する』、『地域、経済、文化』という 3 本の軸でまとめた後、「文化資源学フォーラム会議」で先生方への報告を行った。第 1 の軸『祭り』では、「祭事」（宗教性、五穀豊穡、祭礼・神事、閉じられた祭り）と「催事」（経済的効果、地域振興、イベント、開かれた祭り）、「越境する祭り」（YOSAKOI ソーラン、高円寺阿波踊り）、「新しい祭り」（横浜開港祭、トリエンナーレ）、「祭りと技術伝承（音楽、道具、踊り）」、「祭りの展示・体験（民俗芸能資料館）」など

がキーワードとなった。第2の軸『記録する、伝える』では、「ライフログ（日常生活を記録する）」、「芸能技術の伝承（家元制度、秘伝、暗黙知）」、「口承文化（神話・伝説）」、「文化を伝える（文化施設と教育普及、エデュケーター）」などがキーワードとして挙げられている。また、第3の軸『地域、経済、文化』には、「文化とマーケティング（阿修羅展、トーハク）」、「公共性とサービス業化（文化施設の経営難）」、「消えた博物館（資料の散逸、ハコモノ）」、劇場法などのキーワードが残った。そして、そこで先生方にいただいたご意見から、第1の軸と第2の軸に当面絞って具体的なテーマを見つけ出すこと、「記録する」と「伝える」については分けて考えてみることに、などの方針を確認した。

その後、フォーラムで伝えたいこととその動機を意識するとともに、『祭り』の定義についても議論をする中で、「祭りが変わる・祭りをつくる」という新しい視点が生まれた。一方、『記録／伝える』についても「文化を伝える」という視点から「記録と記憶」というキーワードにつながり、こうした考えをまとめて5月末の「第3回フォーラム会議」で発表した。先生方からは、次回までに実際の対象を調べて発表すること、そしてその際にその対象が「今」の問題としても成立するのか確認することが大事、などの課題を指摘された。それを受けて、メンバー全員が『祭り』に関して自分が関心のある対象の一つを選び、個別にレポートとしてまとめ、発表するという試みを行った。だが各メンバーの選んだテーマにはバラつきがあったため、後日あらためて内容を整理し、議論したが、一本化するには至らなかった。一方『記録／伝える』については、メンバー有志が自分の関心をもとにさらにテーマを発展させて議論していく過程で、「まちあるき」というキーワードが生まれ、その延長線上で『地図』についての企画案の提示があり、初めてメンバー全員がそれぞれの関心で議論できると思われるテーマ候補が挙がった。なお、この時点で、『祭り』という軸からテーマを見つけ出すことを断念した。議論を重ねたが、最終的にメンバーの関心が一つにならなかったことがその理由である。

6月の「第4回文化資源フォーラム会議」で、フォーラム・テーマ『地図の情報・地図を楽しむ（仮題）』として企画意図の説明を行った。ある先生からは、地図は様々に語られ、同時に問題も多い対象なので、どう絞りこむかが重要という意見があり、またご自身の研究の一部で地図を扱っている先生からは、ゲストを探すのに苦労はしないテーマなので、先に自分たちで徹底的に課題を考えた方がよい、というアドバイスをいただいた。私たちは、地図をテーマとする企画書の構成を考えるに当たり、「開催の時期や場所の確保」、「地図の現況調査」、「発表形式の選択」、「ゲストの選定」の4つの項目に分け、各々2人の担当者が組んで検討を進めた。また、準備を進めているなかで、お招きするゲストについては学術的な専門家だけでなく「地図を作る人」、「地図を使う人」という観点から選びたいという意向が私たちの中に生まれた。こうして企画内容は少しずつ現実化していったが、地図そのものについての知見を深める必要があるのではという意見もあり、基礎図書5冊の講読と各メンバーが興味を持った文献を1冊選ぶ自由図書講

読を課題として、夏期休暇中の8月にメンバーが集まり、全ての文献についての読後感を一人ずつリポートすることにした。

第5回の「フォーラム会議」は7月に行われ、私たちはタイトル案を『地図楽（ちずがく）』、テーマは「地図を作る人と使う人の交差—地図はどこまで変化するのか？地図はどのように楽しめるか？—」として、企画内容を説明し、併せて実施日と会場についても提案した。しかしゲストについてはまだ決められずにいた。先生方からは、文献リストはやや偏っている印象があるとともに、地図の未来など、今地図に何が起きているのかを扱うためには、既存の文献を読むだけでいいのかとの危惧の念が示された。一方で、「過去にも地図は繰返し変わってきたはず。世界観の変化に伴って地図はどのように変化してきたのか？」という提言をいただき、これはその後のテーマ展開にとって重要な意味を持つこととなった。また、「文献リストの偏り」については、私たちの関心がアカデミックな地理学上の地図というよりも、地図を作る、地図を使うという志向に寄っていることに起因していると考え、あえてリストを変更することはしなかった。

こうした活動と平行して、7月から9月にかけての地図関係者へのインタビューを計画した。毎回数名のメンバーが参加して、実際にお会いできたのは、渡邊實様（株式会社人文社）、佐野正弘様（ライター）、柴崎亮介教授（東京大学）、寺本広幸様（株式会社ゼンリン）、尾関憲一様（日本放送協会）、大野裕幸様（国土地理院）の方々に、この順に貴重なお話を伺うことができた。地図制作にかかわるデジタル技術の進化、地図をデジタル加工したり、古地図を復刻したりしての商品化、学術的分野の最前線での地図の現状、またアナログ地図を持って東京の都心を歩く面白さをテレビというメディアを通しての紹介する、といった情報あるいは考え方は、私たちにとって大きな刺激となった。また、全てのお話の中に何らかの形で東日本大震災が現れ、大震災が地図にもたらした深く重い影響を知ることもなった。

インタビューの結果を検討した後、ぜひお呼びしてお話をさせていただきたい数名の方を想定して、私たちはフォーラムの柱としてパネルディスカッションを選んでいたが、その時点でまだタイトル、開催日時、開催場所が決まっていなかった。9月の「文化資源フォーラム会議」では、夏期休暇中の活動実績と企画内容の進展について報告し、先生方から、上記の未定の点について、急ぎ進行させるようにとのご指導があった。

10月に入って、ようやく決定した3名のパネラーの方々に関する2次リポートから始まり、企画書、広報計画、進行表・工程表までの各作成業務をメンバーで分担し、パネルディスカッションについてはメンバー1名がコーディネーターとして参加し、シナリオを用意して進行させる形式で全員が了解した。それは、これまで実施された文化資源学フォーラムとは少々異なり、学生だけでフォーラム全体の運営進行を管理するというチャレンジでもあった。また懸案であったフォーラム・タイトルは、議論の末「地図×社会×未来—わたしたちの地図を探しにいこう—」で決定した。「社会」が変化していくことで、「地図」が変化していく、そして「地図」が変化することで「社会」が変化していく。こうした相互関連の中で考えると、「地図」の「未来」とは「未来」の「社会」を考えることではないだろうか。「未来」

の私たちの「社会」はどんな「地図」を必要とするのかという思いをこめて、そしてこの3つのキーワードを掛け合わせることで何倍もの相乗効果を期待して、このフォーラム・タイトルとしたのである。

iii. 具体的な調査報告1：文献購読

「地図」というキーワードについて話し合う際、実行委員の中でも地図に関する知識にバラつきがあること、興味分野が異なることをうけて、まずは図書を通じて地図に関する知識の強化と問題意識の共有を目的とした勉強会を開いた。学生が選んだ必読と思われる「基礎図書」5冊の講読と、有志メンバーによる「自由図書」の紹介を課題として、夏期休暇中の8月にメンバーが集まり、課題図書5冊については、重要と思われるポイント・個人的に興味を持った点等について報告し、自由図書についてはどのような内容であるか、どんな点が重要と思ったかといった点を簡潔に書評した。また、フォーラムの準備期間を通じてメンバーそれぞれに必要なに応じて文献を参照した。

本項では、参考文献の一覧、課題・自由図書の選出理由ならびに課題図書の内容要約、勉強会での議論をまとめた後、会全体の総括を付したい。

1. 参考文献一覧

1) 課題図書

杉本史子・磯永和貴・小野寺淳・ロナルド トビ・中野等・平井松午編『絵図学入門』東京大学出版会、2011年

タモリ著『タモリの TOKYO 坂道美学入門』講談社、2004年（新訂版：2011年、電子版、2011年、電子版、2011年）

中沢新一『アースダイバー』講談社、2005年

木下直之・岸田省吾・大場秀章『東京大学本郷キャンパス案内』東京大学出版会、2005年

『東京人』都市出版株式会社、2012年8月号、314号

2) 自由図書

応地利明『地図は語る：「世界地図」の誕生』日本経済新聞社、2007年

若林幹夫『増補：地図の想像力』河出書房、2009年

佐野正弘『位置情報ビジネス：「位置ゲー」が火をつけた新しいマーケット』マイコミ新書、2011年

松本泰生『東京の階段～都市の「異空間」階段の楽しみ方～』日本文芸社、2007年

牛島隆信・栗原景『秘境駅』メディアファクトリー、2008年

2. 課題図書要約とその選出理由

1) 『絵図学入門』

2006～08年度の科研「地図史料学の構築－前近代地図データ集積・公開のために」、2009～11年度「『地図史料学の構築』の新展開－科学的調

査・復元研究・データベース」(研究代表者 東京大学史料編纂所杉本史子)の研究成果としてまとめられた「はじめての総合的入門書」。歴史学・歴史地理学からのアプローチが中心であるが、都市史(阿部貴弘氏、渡辺理絵氏)保存学(荒井経氏)、数学史(佐藤賢一氏)、建築史(西和夫氏)といった他分野を加えて全体が構成されており、近年の横断領域的研究の在り方を反映している。地図に関する大型科研の充実ぶりが伺える一書。

フォーラムのテーマである地図について基本的な知識を全員で共有しておかなければならないという判断と、最近の著作であることから地図学の現在に関する知見が得られるであろうという期待から選出した。

2) 『タモリの TOKYO 坂道美学入門』

著者タモリの個人的な趣味である坂道ウォッチングが、会員二名の日本坂道学会設立、講談社の雑誌『TOKYO★1週間』で「TOKYO★坂道美学入門」の連載開始へと発展し、2004年に単行本化されたもの。その後坂道愛好家に支えられ、2011年に新訂版と電子版を刊行、まさにまちあるきブームの立役者となった一書。地図に表現することで消えてしまう景色の一つとして、また、変化の激しい東京の風景の中で、変化せずに残っているものの一つとして「坂道」を取り上げている。写真も多く、坂道をキーワードにしたまちあるき本でもあり、幅広い読者層がいる。

近年のまちあるきブームのきっかけを調べていく中で幾度も言及されていた二冊のうちの一つである。著名人が出した本としてポップな受け取られ方をされているが、まさにそのことが広く一般に地形やまちあるきについて興味を持たせるきっかけとなったのではないだろうか。まちあるきについて調べていた私たちにとって必ず押さえておかなければならない一冊であろうと考え選出した。

3) 『アースダイバー』

思想家・人類学者である中沢新一の著書。現代の東京の地図に堅い土で出来ている洪積層と砂地の多い沖積層をトレースし、その時代にどの辺まで海や川が入り込んでいたかを確認できるようにした「縄文地図」を用いて、東京を再探検していこうというのが本書のコンセプト。帯に「散歩の革命」、「見たこともない、野生の東京が立ち上がる」とあるように、まちあるきブームの一つの改革を起こした本。2012年時に20刷となっていることから本書の反響の大きさが伺えよう。2010年にはアースダイバーマップ Bis が開発され、2012年には『大阪アースダイバー』も出版された。

近年のまちあるきブームのきっかけを調べていく中で幾度も言及されていた二冊のうちの一つである。こちらは著名なアカデミシャンの著作であり、地形に対して研究開発的・思想的な分析も行われており、一般向けの著作とは異なる独特な受容をされたものと思われる。近い時期に『タモリの TOKYO 坂道美学入門』、『アースダイバー』という毛色の異なる著作が火付け役となりまちあるきブームや地形への注目度が高まったことには時代的な理由が垣間見えるのではないかと考え、ブームを現象として捉えるために必要であると判断したことから選出した。

4) 『東京大学 本郷キャンパス案内』

東京大学の植物学の大場秀章、建築学の岸田省吾、文化資源学の木下直之による東京大学のガイドブック。赤門からスタートし、広大な本郷キャンパスを全部で8つのゾーンに分けて紹介していく。植物・動物・建物を中心としながらも、古地図や銅像を用いてキャンパスの歴史、加賀藩邸時代へと誘う。明治19年の帝国大学令から明治30年に京都帝国大学が出来るまでの、わずかな期間にしか存在しなかった「帝大」の文字をあしらったマンホールの存在など、見落としがちな所にも目を配っている。植物のコラムもある。

地図をテーマに決めた当初フォーラムの形として「本郷キャンパスの中を歩く」というワークショップ形式も案として考えられており、主催者側として最低限本郷キャンパスについて知識を持つ必要があったことから選出した。結局ワークショップ形式は採用しないこととなったが、東京大学自体が歴史の積層を持った大変興味深い場所であると理解できたことや、特定の地域の歴史をどのように見ることができるといった視点を養うことができたという意味で意義のある一冊であった。

5) 『東京人』

東京を舞台に生きるヒト「東京人」のあり方を模索し、彼らが創りあげていく歴史・文化・風俗・建築物・文学・風景など、東京という舞台が生み出す様々な事象を各号の特集で取り上げている月刊誌の2012年8月号の特集「凹凸を遊ぶ 東京地形散歩」。2003年に「東京スリバチ学会」を設立した皆川典久氏の文章に始まり、皆川氏と東京を空間と構造で論じる神内秀信氏、NHK「ブラタモリ」プロデューサー尾関憲一氏の対談などが盛り込まれている。現在、東京で地形を楽しむということがどのような様相を帯びているのかに迫った一書。

数年前に出版されたものばかりでなく、現在進行形で地形や地図に焦点を当てた書物を読むことも重要であると考え選出した。話題の変遷がめまぐるしい月刊誌の2012年8月号で地形に関する特集が組まれていること自体、まさに今地形や地図に注目が集まっていることを示しており、今年度の文化資源学フォーラムで地図を取り上げることの意義が大きいということを確認することができるかと判断した。

6) 勉強会後に全員で講読した文献

「列島踏破 30万人 執念の住宅地図」NHKプロジェクトX製作班『プロジェクトX挑戦者たち 26 復興の架け橋』日本放送協会、2005年

ゼンリンの『住宅地図』が一枚の「温泉案内図」からスタートし日本にしかない緻密な地図と呼ばれるようになるまでの軌跡を追ったもの。温泉案内図を作り始めた昭和22年から現在に至るまで、ゼンリンの地図作成には常に人が介している。全国にある建物全てを、一軒一軒網羅して標記を確定する地図の作り方は全く変化していない。一方で営業や技術改革などは、まさ

に人との出会いがあって進化していく。地図を作るということがどういうことなのかを教えてくれるドキュメンタリー。

3. 自由図書概要とその選出理由

1) 『地図は語る：「世界地図」の誕生』

同書では、古代の宗教的世界観を表現した「地図」から、大航海時代を迎え、実測に基づく「世界地図」が描かれるに至る経緯を、その背後にある世界観の変遷の歴史として描いている。地図とは何かという問いを立てた際に、そもそも地図と地図でないものはどのように区別されるのだろうかという疑問を持っていたため、実測図の成立以前の「地図」的な図像を扱った同書を選び、「地図」の本質的な要素についての知見を得たいと考えた。

2) 『増補 地図の想像力』

地図そのものを捉えるだけではなく、例えば地図と文化といった視点でのアプローチの図書を探した結果、イメージに最も近かったのが本書であった。章タイトルの「地図が社会を可視化する」、「近代的世界の「発見」」、「地図としての社会、地図を超える社会」、「全域なき世界へ」などの言葉に惹かれた。地図とその周辺、特に地図の存在や変化が人や社会に与える影響、もしくは、育む文化のようなものを捉える視点が示されており、内容としては問題提起に留まるものであったが、特に「全域なき世界へ」の章は地図の未来的なものも予感させた。

3) 『位置情報ビジネス：「位置ゲー」が火をつけた新しいマーケット』

携帯電話やスマートフォン、GPS 機能による位置情報、そしてインターネットの技術的發展を通じて、コロニーな生活☆PLUS（コロプラ）、ケータイ国盗り合戦、しろつく、foursquare といった、「位置ゲー」「ジオメディア」などと呼ばれる新しいモバイル・コンテンツやコミュニケーション・サービスのビジネスが近年人気を博している。本書は、観光産業からは期待の星として、インターネット業界からはソーシャルの次として注目を集める、これらの位置情報ビジネスの広がり、今、何をもちたらそうとしているのかを説明する概説書である。ここで論じられている位置情報ビジネスは、地図の主要要素である「位置情報」から技術發展を通じて派生した「地図的なもの」の一例であると言える。これらの概要を探る事は、私たちの社会と地図の関係を広い視野で捉えるのに役立つと考えたため、本書を選出した。

4) 松本泰生『東京の階段～都市の「異空間」階段の楽しみ方～』日本文芸社 2007年

地図に関する調査を行う中で、近年のまちあるきブームや震災の影響で、人々の関心が坂道や地形に向いているということに興味を持った。同書は、都内にある階段を疲労感・景観・スリル・立地という観点で検証し、階段の利用者数や年齢層を考察することで、まちが階層を持っているということや、その土地固有の階段の魅力を解説している。様々な視点から階段の魅力を分析している本書から、地図上で表現されることがない階段を考察することで

見えてくる都市の姿について考えたいと思った。また、課題図書である『タモリの TOKYO 坂道美学入門』における坂道との比較を行うためにも、この図書を選んだ。

5) 牛島隆信・栗原景『秘境駅』メディアファクトリー、2008年

まちあるきと平行して人気の高い趣味としての鉄道に注目し、地図的なもののさらに異なる側面を見ることを共有したいと思い選出した。また著者の牛島氏のように、地図に関連する分野のブームにはそのブームを牽引するリーダーのような人が幾人かいるようだという意識も皆で共有したいと思った。とはいえ、選出者が個人的に鉄道好きであり、また最寄駅が無人駅であるような田舎で育ったというようなことも少なからず影響しているであろう。

4. 勉強会での議論

1) 『絵図学入門』

絵図の歴史と分類、作成技法、研究の現場に関する地図の捉え方を確認した。ジオラマ技術は近代の産物だと考えていたが、17世紀に既に3Dに通ずる発想がなされていたという点が興味深い。一時は史料的价值が低いとされながらも、同時代の歴史認識を知るための資料として再評価されたという、「古図」についての記載は、文化資源学の理念に相通ずる部分があると思われる。フォーラムのアプローチとして、例えば「震災と地図」といったテーマは既に災害地理学の分野で研究が進んでいるため、「楽しみのための絵図」等の側面に着目していくべきではないかという指摘もされた。

2) 『タモリの TOKYO 坂道学入門』

本書を読む限り、「坂道」を楽しむ流行には単に地理学的なアプローチだけではなく、①江戸の歴史、②写真（カメラ）といった側面があることが分かった。ただ坂道だけに特化した編集でなく、周辺の観光地やカフェなどの紹介もあり片手にもった街歩きに適しており、女性受けも良さそうである。

変化の激しい東京において、変化しない坂道、あるいは、地図では表記があればそこが坂であることがわかるものの、実際に現場にこなければ体験できないものが坂道散策の魅力となり得るのではないだろうか。

3) 『アースダイバー』

本書で取り上げられている「地図」は、縄文期の地形を写した地図であるが、筆者は「アース」という言葉を用いて、「地層」つまり縄文期から現代に至る地形の変容に着眼すると同時に、「地界」つまり古来日本人の信仰の中にある黄泉の国の世界のイメージを重ね合わせているように思われる。ただし、本書に登場する「地下世界」は、単に想像の中の異界ではなく、現実の地形の観察の中から立ち現れるものであるという点が興味深く、また本書の東京論を特異なものにしている点でもあると考えられる。

4) 『東京大学 本郷キャンパス案内』

「地図」という切り口から本書を見ると、度々登場する内田祥三によるキャンパス設計の油彩画と、さまざまな年代におけるキャンパスの航空写真が多く登場する点に着目してもよいと思う。以前会議の際木下先生のコメントにあったように、「上から見る（俯瞰する）」という発想は明治以後に生まれたものであり、内田祥三がおそらくは俯瞰的な視点を持ちつつ、キャンパスの構造を設計していったという点は興味深い。

さらに議論の中では、東大構内の地図はどのくらいあるのだろうか？問いが投げかけられた。本書を通じて、東大構内だけでもさまざまな開発が施され、めまぐるしく地形が変化している様子が伺えるが、それを地図がどこまで追えているのかについて、考える余地がありそうである。

5) 『東京人』

「地図」ではなく、「地形」に主眼が置かれた特集ではあるが、「地図」と実際の場所の観察の両面から「地形」を文字通り立体的に楽しむということが関心の中心であり、とりわけデジタル化による楽しみ方の変化という点が、地形ブームを考える際に重要であることを確認した。江川達也氏のインタビューの中に登場する、「この地図（注・等高線による色分け図）も最初是人に見せるつもりは全くなくて、あくまでも個人的な趣味でつくったものなんです。もっとも、趣味でなければ、こんなものはつくれないと思いますが。（笑）」という言葉に象徴されるように、地図が実用性から切り離された所で活用されるという点が、地形ブームを考える上で興味深いという意見が挙げられた。

「ブラタモリ」に関して、チーフ・プロデューサーである尾関憲一氏は本誌の中で、「まちあるきの途中に、地味で普段は気がつかないけれど、言われてみるとなるほど、というポイントの歴史をさかのぼり、時間を越えてみよう」という当初の目的が、番組内に地形の要素が根付くことで、「人が住み続けている場所は過去からも続く空間で、それが歴史や建物を含めた土地と絡み合って重層的に見えてくる」といった面白さ、道路の高低差などマニアックな話題が出てくるようになった、と指摘している。番組視聴者に受けが良いという、このブームに研究者も啓発されたのではないだろうか。

また今、「地形」というテーマを扱う意義についても議論した。震災以降に地図を手掛かりに町のアイデンティティの見直しやまちづくりのキーワードになっているが、この二つはより本来的なものなのかという点である。

さらに、地図を手掛かりに「七つの丘」を踏破、再開発によって消えた谷を地名と新旧地図を比較する、古地図を読み解き、地図を自作、デジタル地図の使い方、複数の地図を表示させて、現在地の新旧の比較を行うといった現代における地図の楽しみ方についても議論を交わした。

このように課題図書を読む限り、地図をとりまく環境（地図を楽しむ人も含めて）についてはここ20年くらいのブームがあることが確認できたが、書店を見てみても、この点を客観的にまとめた本は見当たらなかった。その流れをまとめるとすれば、80年代に「江戸東京学」という捉え方が生まれたことをきっかけに、2000年に入り、地図を手掛かりに地形（凹凸、高低差）を楽しむことが『アースダイバー』の出版および「ブラタモリ」という

テレビ媒体をきっかけに促進され、さらに近年のデジタルツールを加えながら、より高度な地形探索が行われているということが言えるであろう。地図そのものの変化もさることながら、地図をとりまく人々の地図との関わりも興味深い。勉強会での議論を通して、これほどに人々を引きつけ続ける、地図、地形探索の魅力は何なのかという問題意識を共有することができた。

5. まとめ：勉強会の総括

まず指摘出来ることとしては、今回の課題図書 5 冊が扱う舞台が全て東京であったように関連書籍全般を通じて東京に着目する傾向が見られた。このことは、日本の近代社会が東京という空間を中心に作られてきたことを反映していると言えるだろう。また、「地形」「まちあるき」「秘境駅」といったブームのテーマには、それぞれ何人かの牽引者がいることを把握することができた。他方で、地形・地図・まちあるきブームが細分化される中で、その総体は未だに論じられていないことが明らかとなった。なお、デジタル化について考える上では、「地図」という言葉の包含する範囲に関する認識が人によって異なることが確認されたため、「地図」と表現する際には注意が必要であるということも共有した。

勉強会を行うことで、地図を取り巻く環境が変化し、「地図的なるもの」が多様化する現代において、未来の「地図」の姿や、「地図」受容のあり方・楽しまれ方が今後どのように進化していくのかについて考えることができた。その後のインタビュー活動においては、こうした興味関心を踏まえた質問が組み込まれることとなった。

iv. 具体的な調査報告 2：インタビュー

1. インタビューの実施

2012 年 6 月下旬にフォーラム・テーマとして「地図」を取りあげる方針が決まり、その企画構成案作成のためメンバーを 4 つの作業グループに分けて準備を進めることになった。その内の一組が、ゲストスピーカーの選定も念頭におきつつ、インタビューの計画と実施を担当した。インタビュー先の検討に当たっては、「地図を作る」、「地図を使う」、「地図を楽しむ」というジャンルに沿って私たちの考えるそれぞれの候補を個人、企業にかかわらずリストアップし、これまでの実績や企画力、また近い将来を見据えた新研究などの点から依頼先を絞り、交渉を始めた。

行政機関として土地測量や地図制作を管理する国土地理院、地図をさまざまに商品化する出版社として株式会社人文社、地図の活用を国際的に展開する企業として株式会社ゼンリン、地図を読む楽しさをマスメディアの番組として伝える NHK、また携帯電話に関連した幅広い分野の情報を発信する佐野正弘氏、の各企業及び個人の方々に本フォーラムの趣旨説明とともにインタビューの申し入れを行った。その他にも候補先は用意されていたが、幸いにも全ての申し入れ先から好意的な回答をいただくことができた。また、株式会社ゼンリンの広報部より、東京大学空間情報科学研究センター所属の柴

崎亮介教授をご紹介いただき、同教授にご連絡したところ私たちの訪問を快諾していただいた。

インタビュー実施先リスト (2012年)			
実施日	名称	お名前 (敬称)	場所
7.23	(株) 人文社	渡邊 實 (代表取締役)	人文社 (文京区)
8.29		佐野正弘 (ライター)	本郷 (文京区)
9.1	(株) ゼンリン	寺本広幸 (広報部課長)	ゼンリン (千代田区)
9.5	東京大学	柴崎亮介 (教授)	柴崎研究室 (目黒区)
9.11	日本放送協会	尾関憲一 (制作局チーフ・プロデューサー)	NHK 放送センター (渋谷区)
9.13	国土地理院	大野裕幸 (基本図情報部地図情報技術開発室室長)	地図と測量の科学館 (茨城県)

なおインタビューに際しては、以下3問を共通質問とし、加えて相手先の活動に関連した質問を参加メンバー各自が用意して臨んだ。

- 1) 地図の将来 (可能性) についてどのようにお考えでしょうか。
- 2) 昨今の地図ブームやまちあるきブームをどのようにお考えでしょうか。
- 3) GIS など次世代の地理空間情報の活用に関して、どのような (企業) 方針をお持ちでしょうか。

2. まとめ：インタビューの総括

当初、私たちは地図の制作や商品化、また多様な使用法や楽しみ方という観点からインタビューを計画したわけであるが、お会いした地図に関連するお仕事をされている方々のお話をお聴きするうちに、私たちの関心は「未来の地図・地図の将来」に自然とフォーカスされ、これをフォーラムの軸として考えるようになった。別な言い方をすれば、「地図」をキーワードとする現状や近未来への方向性の全体像が見えたように思えたのである。

例えば、人文社の地図は表示される字が大きくて見やすいとメンバー数名が感じていたことについて、大きな字の地図は人文社が開発したもので反発もあったが、地図上の情報量を減らしても読みやすさを優先する方針を貫き、高齢化の進展もあって次第に普及したという事実を知った。また、古地図には著作権がなく、復刻した当事者に著作権が発生するため、復刻するだけでなく必要に応じて原本にない情報を落とし込むことが可能になり、これまでにない地図を作ることができるようになった。どちらも社会のニーズを考えた商品化と言えるだろう。

住宅地図という海外では存在しないユニークなプロダクトを商品化したゼンリンでは、全国 70 拠点で延べ 28 万人の調査員が住宅地図情報の更新にあたり、「情報は足で稼ぐ」というおそらく創業以来の社是がある一方で、収集したあらゆる情報を地図化して価値を生み出すという言葉が印象的であった。同社では、地形情報・位置情報・時空間情報といった多様な情報を可視化したものを総称して「地図」と呼んでいるが、これは、佐野正弘氏が「地図を超えた『地図的なもの』の領域が広がっている」と表現されたことと重なる。

その佐野氏も注目する「位置情報」について、国土地理院は「これまで位置というものは、地図という図面上のある一点という捉え方が一般になされてきたが、近年では数値として捉える見方が広まっている」という理解を示された。また測量という観点から、同院は最近 10 年間の「情報処理」や「情報取得」についてデジタル化の急速な進行などの変化を指摘しつつ、今後は地図という形を経由せずに地形データが情報処理される可能性を予測している。こうした地図の未来についての予測に関しては、共通質問としてすべての方にお尋ねしたわけであるが、それをもっともダイナミックに提示していただいたのが柴崎教授であったと思う。

柴崎教授が所属される「東京大学空間情報科学研究センター」とは日本の空間情報科学の研究拠点であり、その活動は私たちの多くが聞いた覚えのなかった「地理空間情報活用推進基本法」（2007 年制定）によって活発化したようだ。同教授によれば、近年の GPS や携帯電話の発達と普及が大きな要因となって、これまで紙の地図には描かれなかったヒトやモノの流動的な情報が「地図」と「位置情報システム」の間に出現したという。世界で 60 億人といわれる携帯電話ユーザーを追跡することが可能となり、こうしたデータを地図に落とししていくことで、行政による災害対策や企業のマーケティングに利用される汎用性をもつとともに、ヒト・モノの流れといった流体情報やリアルタイム情報そのものが地図を楽しむ選択肢の一つになっていくだろうという予測を新鮮な驚きをもってお聴きした。そして私たちはこうした技術革新と社会のニーズとの関連性を考えさせられると同時に、過去から現在にかけての間にも同様に地図の技術革新があったであろうことを確信した。

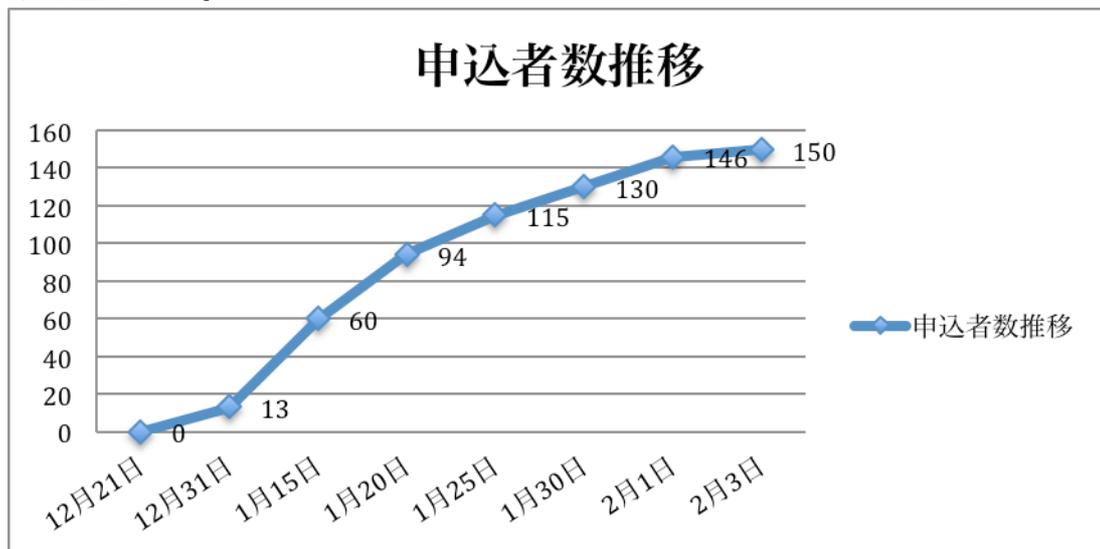
「地図を楽しむ」というテーマを考える上で、全国で毎回数百万人程度が視聴していると想定されるテレビ番組『ブラタモリ』のプロデューサーである尾関氏のお話は興味深かった。デジタル世代の若い社会人はすばやく情報や知識を収集する能力に優れている一方で、自分の眼で発見することや自分にとっての「一次情報」を積極的に集める能力が不足しているかも知れないというご指摘は、同氏の説得力のあるお話に私たちが感服した一例として挙げておきたい。

v. 申し込み状況と当日の受付数

1. 申込状況

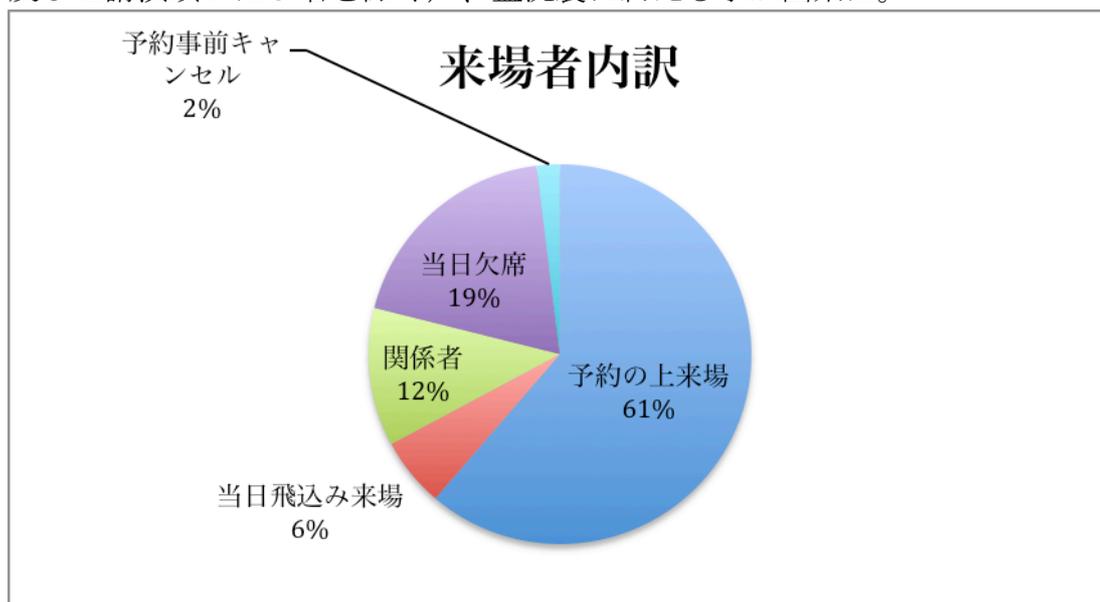
2012 年 12 月 22 日よりウェブサイトを開設し、申込受付を開始した。2013 年 1 月 13 日に twitter と facebook ページの連動を開始すると、60 名強

の方々からご登録を頂いた。また、人文社会系研究科ウェブサイトイベント欄にフォーラムの情報を掲載し（1月16日）、メーリングリストを配信（1月17日）した事を受け、1月21日時点で100名近いお申込を頂いている。1月22日には毎日新聞夕刊にフォーラム情報を掲載して頂いた事を受けお申込者数は増加、1月末には定員到達が現実味を帯び始め、2月3日に晴れて定員150名に達した次第である。皆様の厚いご関心を賜り、改めて感謝を申し上げたい。



2. 当日の受付数

フォーラム当日は、ご予約を頂いた方々が6割、当日飛込みが1割弱、研究室またはフォーラム関係者が1割強、全体としては事前に把握していた見込み数に対して8割のご出席を賜った。全参加者数は155名（実行委員8名及びご講演頂いた3名を除く）、盛況裏に終える事が出来た。



III. フォーラム当日の報告

本章では、2013年2月16日（土）に東京大学本郷キャンパス法文2号館一番大教室で行われたフォーラムの記録をまとめたい。尚、フォーラムの開催概要及び次第は下記の通りである。

【会場】 東京大学本郷キャンパス 法文2号館一番大教室

【開催日時】 2013年2月16日（土）14:00～17:30

【主催】 東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究室

【協力】 国土地理院、佐野正弘、（株）人文社、（株）ゼンリン（五十音順、敬称略）

【後援】 文化資源学会

【次第】

14:00 開会挨拶 木下直之教授（東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究室）

14:05 学生発表「なぜ、いま、ここで、地図なのか」

14:20 講演 1「空間情報科学の最前線—動く地図とその未来—」 柴崎亮介氏（東京大学空間情報科学研究センター教授）

14:50 講演 2「地図の歴史を考える—人・空間と地図—」 鈴木純子氏（（財）地図情報センター監事・伊能忠敬研究会理事）

15:35 講演 3「『ブラタモリ』で見えてきた都市の秘密—"まち歩き番組"制作と古地図の関係—」 尾関憲一氏（NHK 制作局エンターテインメント番組部「ブラタモリ」チーフ・プロデューサー）

16:10 パネルディスカッション 「社会が変える地図、わたしたちを変える地図」

17:25 閉会挨拶 小林真理准教授（東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究室）

1. 開会挨拶

木下直之教授（東京大学大学院文化資源学研究専攻）

皆さん、こんにちは。たくさんお集りくださいまして本当にありがとうございます。入りきれなくて隣の会場に入られた方々はこちらに移動されたのでしょうか。隙間がありましたらできるだけお詰めください。

主催者を代表してご挨拶を兼ねて、この文化資源学フォーラムについてご説明したいと思います。第12回ということなのですが、この研究室が2000年にスタートしましたので、13年になるわけですね。スタートした翌年から毎年1回公開のフォーラムを続けてまいりました。最初はわれわれ教師の方からテーマを与えて、学生がそれをフォーラムという形で、こういう公開の場で一緒に問題を考えるという形で始めたのですが、5回目ぐらいからテーマも学生が選び出すというような形で、はっきりと学生主体の事業になってまいりました。第10回の際は「書棚」をテーマにしたわけですが、この時の学生が『書棚再考』という小冊子を作ってくれまして、この時に私は、ちょうど10回を記念したものですから、短い文章を寄せました。そのなか

にも書いたのですが、このフォーラムは文化資源学研究室に入ってきた学生、当初は修士1年生だけだったのですが、今回からは外部から博士に入ってきた学生も含めて、要するに初めてこの文化資源学研究室に入ってきた人たちがゼロから最終的には今日のこの公開フォーラムを実現する、それを皆で話しあって準備をしていくという、そういった形で進めてまいりました。最初にはですね、私がこの学生たちに課すテーマといたしますか、ある縛りがありまして、二つあるのですが、一つは「どんなテーマでもいい」ということです。これ縛りに聞こえないかも知れませんが、じつは非常に難しいことですね。学生は皆ばらばらな関心をもって集まってきていますし、それから私どもの研究室は社会人を積極的に受入れておりますのでキャリアもばらばら、それから年齢も非常に開きがあります。そのなかで一つのテーマを選び出すこと自体が非常に難しい。だいたい4月から準備を始めまして夏休みくらいまでかかっています。それは今回も夏休みぐらいでようやく「地図」にまとまってきたように思います。それから第2のテーマは、それを公開の場で論じること、公開の場で考えるということです。これはまた簡単に見えるのですね、こういう形で時間と場所を設定すれば公開の場というものは用意はできます。しかし、公開の場でやるということは、自分たちのメッセージを人に伝えるということです、それはやはりたいへんなことだろうと思うのです。テーマは選んだけれど自分たちの考えを今日皆さまにお伝えできるかどうか、そういうことも含めて今日は最後までおつきあいいただきたいというふうに思っております。

今日は本当にたくさん集まってくださりまして、毎回だんだんパワーアップしているような感じがいたします。今日は「地図」が本当にお好きな方が集まっていらっしゃるのだらうと思っておりますけど、5時半までだと思っておりますが是非一緒に考え議論していただきたいというふうに思います。それでは簡単ではありましたが、主催者を代表いたしましてご挨拶とさせていただきます。よろしくお願いいたします。

2. 学生発表「なぜ、いま、ここで、地図なのか」

開会の挨拶に続き、文化資源学研究専攻文化経営学専門分野修士課程のペルシチ・マルコスによる学生発表「なぜ、いま、ここで、地図なのか」を行った。以下、発表原稿及び発表の様子を記録した写真を付す。

こんにちは。ペルシチ・マルコスと申します。

本日開催される文化資源学フォーラムは、授業の一環として、全てを学生で作りに上げていただいております。本日は、地図に関心の深い方にもお集まりいただいておりますが、「なぜ、今、地図なのか？」という



疑問をお持ちの方もいらっしゃると思います。履修生を代表して、本フォーラムの企画の意図と、それに至った経緯について述べたいと思います。そして、現在の地図と地図をめぐる状況について、皆さんと共有したいと思います。

先程も申し上げましたが、文化資源学フォーラムは、文化資源学研究室の異なる研究分野に所属する新年度入学生が、一から企画・運営を行うものです。私たちは、まず何をテーマにするのかを話し合うことから始めました。様々なテーマについて話し合う中で、私たちの興味をひいたのが、「まちあるき」の話でした。ある学生が、地域再発見の方法としての「まちあるき」に注目し、それに対して、「まちあるきには地図がつきものだ」、「地図を自分たちで作ることも多い」、「まちあるきのための地図もたくさん出版されている」といった意見が出ました。そこから、私たちの中に「地図」というキーワードがあらわれました。

さて、地図の基本要素とは何でしょうか？何があれば地図と呼べるのでしょうか。たとえば、広辞苑によれば、「地表にあるものを、一定の約束に従って縮尺し、記号や文字を使って平面上に表現した図」となっています。ただ、それだけでは地図の現実を明らかにしている、とは言えません。

そこで私たちは、「わたしたちがイメージする地図」、また「わたしたちが使う地図」には、どんなものがあるかということ話し合う作業を行いました。具体的には、モバイルデジタル地図、地図帳、古地図、路線図、観光マップ、Google マップなど、メンバーが日常で接しているものだけでも、沢山の地図があることがわかりました。「地図の多様性」を感じました。

次に、わたしたちがどのように地図に関わっているかについても話し合いました。「日本に来るまで地図を使ったことがなかった留学生」もいました。内モンゴルからの留学生、シナさんです。内モンゴルでは日常的に地図を使うことがほとんどなかったそうです。また、このフォーラムでコーディネーターを務める志田君は、地図が好きで、地図の雑誌を愛読しています。

その志田君をモデルに、一人の学生の地図の使い方を考えてみました。普段の生活圏内ではあまり地図を使わずに生活している彼も、友達と待ち合わせる時は、モバイルデジタル地図を使います。夏休みの合宿では、ガイドブックや地図帳を使います。家でネットサーフィンしている時は、Google マップや Google アースを使っています。研究では、都市計画図や主題図も使います。このように一人の地図の使い方にも多様性がみられることがわかります。

こうしたディスカッションを繰り返す間、私たちの関心の中心には、いつも次のことがありました。それは「地図の種類や使い方の多様性」と「人と地図の関わり」には、何らかの関係性があるのではないかとということです。

そこで私たちは、その関心を確認する作業として文献講読を行いました。最初のころ、私たちの地図に関する知識はばらばらでした。そこで、まず地図に関する基本的な参考書、そして、私たちの通う東京大学に関する本などを読むと同時に、わたしたちが関心をもっていた「まちあるき」の本を何冊か読んでみました。これらの文献購読から、過去 10 年間に、地図を使って、まちの記憶や地形を実際に歩いて楽しむ人たちの「楽しみ方」が変化している

ことが確認できました。それは、遠くにある史跡を見に行くという行為だけではなく、自分たちの住んでいるまちを歩き、再発見をしていく楽しみ方。また、地図に表現されていない坂道や川などを探して歩くという楽しみ方です。ある学生が選んだ位置情報ビジネスに関する本からは、地図の中に人やモノの、動きの情報を加えながら、ビジネスに利用したり、ゲームとして使ったりしていることを知りました。地図の楽しみ方が多様化している一方で、デジタル化や携帯電話の普及に伴い、地図自体も大きく変化しているということにも、私たちの関心が向くようになりました。

文献講読の作業と並行して、地図に関わっている方々へのインタビューを実施しました。地図作成に関わっておられる方々へのインタビューでは、地図作成のための技術が、私たちの想像をこえて進化していること、また、その進化を支える開発研究の現場を目の当たりにしました。地図作成の現場には、無限の可能性があったのです。一方、歴史的な変遷として、どんな地図が実際に作られ、使われて来たのかという歴史研究者の話からは、地図が技術だけでなく、人や社会と関わって発展してきたことを知ることができました。またある方は、「宝の地図」のように、地図にはミステリアスな要素があると話してくれました。地図は、私たちにとっての道具であると同時に、私たちの興味や関心、時には行動をうながす不思議な魅力があるということに気がきました。それぞれのインタビューの中で共通して出てきたのが、2011年の東日本大震災の話でした。震災は、携帯に便利で、使いまわしが利く、紙の地図を見直すきっかけとなったそうです。

こうした文献購読やインタビューの結果を、私たちは「地図を作る」、「地図を研究する」、「地図を楽しむ」という三つにわけて整理しました。

まずは「地図を作る」ということについてです。これは現在の地図の作られ方を示した図です。まず、国土地理院が測量を行い「地形図」が作られます。測量によって正しい地形図を作るということが、「地図の基本情報」ということになります。この「地形図」をもとに、地図を作成している会社が、それぞれに収集した情報を盛り込むことによって、私たちが日常使っている地図が作られていきます。

地図を研究するということについては、「地図作成者の研究」、「地図が作られた背景についての研究」、「地図を作ってきた技術の研究」、「地図の保存の研究」など、地図の歴史研究が考えられます。それだけではなく、地図作成のための技術開発、地図利用のための開発、地図の副次的利用のための研究もあります。

次に、「地図を楽しむ」ということについてです。地図を携帯して、「まちあるき」を行っている人もいます。最近では、コンテンツツーリズムも盛んです。また、地図自体をデザインとして楽しむ人もいますし、地図を歴史的史料ととらえることもあります。地図をコレクションしている人もいます。最近では地図に掲載される情報を使ったゲームも登場しています。また、これまでに見過ごされてきた地域の資源を発見しながら、新しい地図をつくるワークショップなどが、行政の区域を越えて行われています。

「地図の研究」は、「地図を作る」ということに深く関わっていきます。また、「地図を作る」ということは、「地図を楽しむ」という要素と切り離

すことはできません。当然ながら、「楽しむための地図」を支える「地図の研究」もあります。「地図を作る」、「地図を楽しむ」、「地図を研究する」という三つの要素は、相互に関わりをもっています。この中心には、地図があるのです。ここでいう地図とは、私たちが日常的に接している地図をさします。私たち今の時代の地図と、地図との関わり方について考えました。

さて、はじめに「なぜ、いま、地図なのか？」という疑問をあげましたが、実は、ここには2つの要素が含まれています。それは、「なぜ、今？」ということと、「なぜ、ここ、文化資源学フォーラムで？」ということです。

地図を作成することや地図を楽しむことに、近年、とりわけ変化が起きているということ。また、震災をきっかけにした地図に対するニーズ評価の変化があったということ。こうした地図をとりまく複数の現象が同時代的に存在していることを理解した私たちは、今、地図について考えることの重要性を再認識しました。これが「なぜ、今？」に対する私たちなりの考えです。

次に、「なぜ、ここ、文化資源学フォーラムで地図を扱うのか？」ということについて説明したいと思います。今、私たちの社会の中にある様々な潮流の中で、地図は変化しています。逆にいえば、地図からみえる、過去・現在・未来は、単なる地図の姿の変遷ではなく、その時代を生きる人や社会の姿をも、あらわすものだと考えます。地図を通じて、人や社会のあり方を考えることができる。これが、ここ、文化資源学フォーラムで地図を扱う意味であり、意義であると考えました。そして、私たちはそんな地図を、単一的な視点からではなく、「地図をつくる人」、「地図を研究する人」、「地図を楽しむ人」といった多面的な切り口からとらえてみたいと考えました。本日のフォーラムでは、柴崎先生、鈴木先生、尾関さんの3名の方々にご登壇頂き、講演とパネルディスカッションを行うことに致しました。

私たちのフォーラム「地図×社会×未来」を実施することをホームページやポスター・チラシで広報したところ、大勢の方から申し込みを頂きました。本日この会場にお集まり頂いたみなさんそれぞれにとっての地図があると思います。私たちは、このフォーラムを通じて、みなさんと一緒に「わたしたちの地図」を探してみたいと思います。ご静聴ありがとうございました。

3. 柴崎亮介氏講演：「空間情報科学の最前線—動く地図とその未来—」



東京大学空間情報科学研究センターの柴崎です。私は、先ほどの三つの丸で言うと、「地図を作る」と「地図を研究する」というところについてお話をし、後のパネルディスカッションのための話題提供をしたいと思います。

まず、これを見て頂きたいと思います。これは、携帯電話のナビゲーションを使っておられるユーザの方から承諾を頂いて作ったデータで、5分に1回ずつ位置情報が取られます。全国で

は 150 万人ほどユーザの方がいると言われていますが、その中で定期的にデータが取れるのは 70 万～80 万人分程度です。

これは、大震災のあった 2011 年 3 月 11 日の東京です。ラッシュアワーのピークから、昼休みを過ぎて、地震が起こったのが午後 2 時 46 分。あの時、東京では鉄道が一斉に止まりました。みんな、まずはオフィスまで歩いて帰り、その後震災の大きさに気づいて自宅へ帰ることになりました。夜遅くまでずっと歩いて、その後、道路も多少復旧し、鉄道も一部動き始めています。人の動きが、流星のように加速している状態がわかると思います。もちろんこれは、この日のために特別にとられたデータではなくて、大体過去 1 年間分くらいのデータに含まれていたものです。こうしたデータを研究で使うことが許可されています。

技術的には 5 分間隔でリアルタイムにデータをとることができるので、地震があった時に、どれくらいの規模でどんな人が動いているか、今どこに何人くらいたまっているのか、ということが分かるわけですね。これがあれば、鉄道・ホテル・デパートなどの連携もできますし、人の流れを刻一刻と見ながら、それぞれ今何ができるか考える、ということができるようです。

このような状態のデータが 1 年間分ほど蓄積されています。これはもともとユーザの皆さんのものですので、ここから、みなさんそれぞれがお持ちのデータをかき集めて、今何が起きているか、これに伴ってお金がどのように動いているか、さらに次の瞬間どこに行くのかも予想することができるようになります。このように、「天気予報」ならぬ「ひとの流れ予報」ができるのではないかなと思っています。

まちがあって、まちが動いて、いろいろなアイデアや新しい事業が生まれる。この仕組みを、地図というものを使っていかに支援することができるか、ということに我々は関心を持って、貢献したいと考えています。もちろん、まちには交通問題や、地震の際の被害の大きさといったマイナスの側面もたくさんあります。こういった問題を軽減していくために、先ほどお見せしたようなデータがどんな風に使えるだろうかということも、関心の一つですね。

さて、昨年 1 月頃の日経サイエンスに「NY はいかに犯罪を減らしたか」という記事が掲載されました。[原題 : How New York Beat Crime (SCIENTIFIC AMERICAN August 2011)] いわゆる犯罪学の分析によると、貧困率・麻薬の使用率が高い地域は犯罪率が高いと言われるわけですが、1990 年～2010 年にかけての NY では、貧困率も、薬物過剰摂取による死者の数も、そんなに大きく減ってはいません。それでは、何でこんなに犯罪数が減っていくのだろうか、というのがこの論文のポイントで、実はこの背景には、コンポストッドと呼ばれる犯罪統計があります。統計というと、3 年に一回更新されるイメージですが、この犯罪統計は、毎週・毎月、犯罪レポートに基づいて「どこで、どんな犯罪があったか」を地図に掲載し、統計をまとめ、署長が毎月それを見ながら、それぞれの署について成績をつけるという仕組みになっています。

さらに、「ホットスポット理論」つまり犯罪を起しやすいホットスポットというのがあって、そこに行けば極論すると誰でも犯罪を起こす可能性がある。ならば、犯罪の起こりやすい場所の警備を強化すればいい、ということ

で、とても効果的だったという結論です。このベースには、毎月毎月どこでどんな犯罪が起きていて、どこにホットスポットがあるのかが分かる必要がありますし、それを「みんなで使う」という環境がちゃんとできている必要があります。このあたりの部分が、「地図」という切り口で都市のいろいろな問題を解決したり、いいところをもっと伸ばしたり、ということのために使えるのではないかと我々は思っています。

これは、過去6か月間のある人の移動の記録です。見て頂いて分かるように、東京中が塗りつぶされるわけではありませんし、ある種のパターンや立ち回り先が決まっています。これは、おわかりのように、これは私の軌跡ですが、こうやって私の作るマップ、私に関するマップというのができていく、と言えると思います。

このようなデータが150万人分あるので、それではそのデータにラベルをふっていくとどうなるでしょうか。元のデータは、ただの座標と時刻だけで、名前や性別に関する情報は一切ありません。これに、HomeとかWorkというようなラベルをつけて、解釈可能にしていく作業を、現在行っています。

例えば、点が固まっているところは立ち止まっているところですし、それが重なっているところが立ち寄り先です。これによって自宅や勤務地がおおよそ推定できますし、立ち寄った場所にお店があれば、きっと商業地で買い物をしているよね、といったことが分かるわけですね。こうやってラベルをふって、さらにHomeラベル付きGPSデータを、1キロメッシュで集計します。これと、国勢調査の夜間人口を比較して、150万人分のデータ×90倍すると、日本の人口とほとんど合致します。商業地について言えば、例えば私が年間100万円食費に使うとしたら、その100万円はきっと時間に応じて支出しているだろう、と仮定します。それぞれの商業地について立ち寄った総時間が分かるので、それぞれの場所で費やした時間に応じてお金をチャリンチャリンと落とすようにしていく、と考えます。すると、食費に関しては、実際の商業統計の年間販売額とほぼ一致します。ただ面白いのは、例えば洋服を買うお金については、立ち寄った総時間が長いと支出が多くなるわけではない。このあたりは、商業地の格や、土日か平日か、といった要素を考慮する必要がありそうです。

ここまで分かってくると、どんな交通機関を、どれくらい使っているんだろう、ということも知りたくなります。そのために、まず滞留地点を抽出し、滞留地点の中央にある移動状態を、鉄道の路線などに当てはめて考える、あるいは、「実際にどの機関を使ったか」というアンケート調査を別途行い、データとつぎ合わせます。すると、総計約25万人分のデータから、「移動距離に応じて、どの交通手段を利用するか」あるいは、「都市部と郊外では、どの交通手段を使う時間が長いのか」、「自宅から最寄り駅までの距離に応じて、どの交通手段を利用するのか」、といった傾向が見えてきます。

もう少し「マップっぽい」表現を挙げると、これは電話帳から飲食店の場所とその営業時間をピックアップして、その時間に開いているお店の分布と、そこにいる人の数をGPSで同時に表しています。例えば午後0時~1時の東京だと、歌舞伎町・センター街・六本木・恵比寿・銀座・上野に人がたまっている様子が、赤い点で示されています。

名古屋に行って、夜になるとお店がさっさと閉まるので驚かれた方もいらっしゃると思います。これは名古屋の様子ですが、昼間はかなり多くのお店がありますが、午後 10 時を過ぎると赤い点は急速に小さくなり、午後 0 時を過ぎるとごく一部に残るだけになります。大阪は、なんば、梅田、北新地に人がたまっていますね。大阪の方が、深夜の構造は分かりやすいと言ってもいいのかもしれませんが。特に、なんば周辺は、深夜になると人がたくさん集まってくるという傾向があります。

このように、世の中には夜更かし・出歩き型の人がたくさんいるので、先ほどの GPS データの Home ラベルの付け方のように、「夜いるところ＝自宅」と解析すると、場所によっては過大推定になるわけです。これはそういう反省から、データを俯瞰的に見たグラフです。GPS のポイントは、携帯電話が動いている時に取られます。一定時間置いておくと、GPS はデータを取りません。このポイントを縦軸に、0 時～24 時を横軸に置くと、人の一日の動き方がグラフになります。このパターンを解析すると、大体 11 種類くらいに分類できます。ちなみに、対象は NAVI のユーザなので、もちろんある種のバイアスがあります。男女比は 6:4 で、20 代が比較的多いですが、しかし 20 代から 70 代まで幅広く分布しています。この 150 万人分のデータを 90 倍するとほぼ人口になるわけですが、昼間人口と夜間人口の誤差については、リアルタイムに PASMO や SUIKA で計っている通過人数のデータで補正しています。

こういった新しい地図の作り方の面白いところは、携帯電話のデータをベースにしているということです。今、世界中で人がいる場所はほぼ携帯電話が通じます。世界で携帯電話の台数は 60 億台で、単純に考えると普及率は 80%弱ですね。これはバングラデシュの首都ダッカの携帯電話利用者 300 万人分のログです。大きな紫がかかった丸が基地局の位置で、ダッカの人たちがどこで通話して、どこでメールをしているか、という人の流れを見ることができます。バングラデシュは、洪水やサイクロンなど大規模災害のデパートのような国です。現在、バングラデシュの携帯電話会社と共同で、災害時に、どのくらいの人かどこに残っているのかといったデータを、携帯電話を使ってモニターする研究を行っています。今後 2020 年にかけて、アジアでは利用できる衛星の数がものすごく増えるので、実はアジアは、そういった研究やサービスを行う上で有利な地域になっていくと言えると思います。

そもそも、今は地図も、携帯の位置も、基準点の位置も、全部衛星から決めます。ですから地図というのは今、宇宙を基準にして作っているわけです。こうしたインフラの中で、バングラデシュの例のような、いろんな新しい地図の作り方や使い方の可能性が出てきています。国際連合の潘基文事務総長のイニシアチブで、デジタルデータをリアルタイムで解析して、いかに発展途上国の社会的課題にアプローチするかという、「グローバルパルス」と呼ばれるプロジェクトもあります。

というわけで、今、人々の毎日を写す世界地図を、みなさんのデータを頂いて、みんなで作るということができる時代になってまいりました。以上で、私の話を終わります。ありがとうございました。

4. 鈴木純子氏講演：「地図の歴史を考える一人・空間と地図一」



こんにちは。鈴木純子と申します。よろしくお願いいたします。

地図と言いますと、身近にいろんな地図がございます。地図はまさに多様で、その地図を定義するのは難しいことなのですが、『地図学用語集』の定義や『The History of Cartography』で扱う地図について見てみますと、測量にもとづく地形図をイメージした定義の仕方

と、もっと広く空間を描く画像という形で捉えようとする立場と、大きく分けると二つあるように思います。ただ、これだけでは地図というものについてのイメージを共有することが難しいと思いましたが、羅列的ですけども地図の機能と働きについて挙げてみました。人間は空間と時間の中に生きているわけで、その空間の部分を記録し、再構成することが地図の一つの働きであると思います。空間情報の表現方法として、大きな働きをするということになります。また、一つのメディアとして空間情報を記録する、伝達する。それを使って分析や計量する。先ほど柴崎先生のお話にもありましたが、もともと地図はそういう機能を持っていると思います。記録の面では、「地誌の記憶」を地図に残すことによって、長い時代を経て昔の地誌がよみがえるということがあります。これは古地図を持って街歩きをするということとも繋がってくるかと思えます。記録媒体としての意味を大きく持っているということになります。ただ、地図によって未知の空間を知ることができますが、逆に地図が空間のイメージを作ってしまうという面もあるということをお頭に思い出していただけた方がよろしいかと思えます。

地図の表現については、必ず縮小が伴いますが、単に原型を縮小してコピーしたものではなく、ある情報をいかにして地図にするかというところで、何を地図に書き込むかという選択や一般化といった手続きや作業を伴っています。ものによっては強調をします。また地図の上には、本来目に見えない情報がたくさん書き込まれております。最も典型的なのは、境界です。基本的な要素としては、地名が書き込まれ、記号が使われることもあります。記号を使うことによって地図の表現力は格段にあがります。その記号を使うか使わないかということでも情報選択が行われています。最近の例ですと、二万五千分の一地形図の地図記号に老人ホームの記号が加わりました。社会が老人ホームに大きな関心を寄せるようになり、そういう施設も増えてきたということで記号が加わったのです。何を表現するか、何を強調するかということは、逆に何を無視するか、何を軽視するかということも含んでおります。地図を利用する人たちが、それをどのように受け止めるかという問題が大きな問題としてあるのですけれども、この部分についての研究は少ないと感じております。

次に地図の歴史について考えてみたいと思います。地図はたくさんの分野の技術や仕事によって作られているもので、それぞれの関心のもとで個別研究がなされてきました。また歴史史料あるいは歴史地理史料として、個別の図や図群の研究も蓄積されています。そこに新たに「地図学」という分野ができてきて、地図をトータルで地図として研究するという立場が成り立つ様になりました。国際的には **International Cartographic Association** という地図研究の学会があり、1959年の創立です。日本では1962年に設立された日本国際地図学会というのがあります。どちらも新しい学会で、新しい分野です。この日本国際地図学会の名称は、本日別な場所で行われている総会にて日本地図学会と名称が変わる決定が行われる筈でございます。また、地図史がどういう立場で研究されてきたかということ、科学史とか地理学史とか探検の歴史という形で捉えられることが多かったようです。1980年ごろからは、地図そのものを考える動きと、人文科学全体の新しい潮流の中で、地図の機能とか成り立ちをもう一回社会との関係で見直してみようということがなされ始めました。そして、それぞれの地図の基盤にある人間なり社会なりの空間認識の状態、地図に反映されている空間認識の問題、あるいは地図に含まれている社会的・文化的なメッセージをどう捉えるかということに地図史の視野が広がってきております。一つの例を挙げますと、1746年に **JOHN ROCQUE** という地図制作者によって作られたロンドンの地図があります。もう一つ、同じ時期に **William Hogarth** というイギリスの著名な画家が描いたロンドンの絵があります。絵の方には馬車が倒れて火が燃えていたり、窓の上から何か液体が流れていたり喧噪に満ちたロンドンが描かれています。一方の美しい地図からはこの時代に住んでいたこれらの人間の姿というものは見えません。こうした指摘が、新しい地図史の見方として出てきているのです。

ここで、地図の歴史を現代につなげて少しだけ触れておきたいと思います。地図の歴史は非常に長いのですけれども、今日のテーマから考えて現代につなげるということを第一の条件と考えました。地図のタイムスケールですが、紀元前6200年とされるチャタルヒュイック図という地図があります。これが、年代がわかっている現存最古の絵地図であると言われております。他にも初期の地図はいろいろありますが、これらの地図の相互関係や線的に発達してきたとか、ストーリーをもって現在に至ったということは、なかなか言えないようであります。ただ、長い歴史の中で、地図はだんだんに精度を高めてきましたが、その一方、グラフィックな空間の表現、あるいは伝達手段という地図の基本は時代が変わっても、表現が稚拙であっても精密であっても、その部分だけは不動だということは言えるかと思えます。

次に、現在に至る精密な地図がどのように作られてきたかということで、17世紀から18世紀にかけて地図を作るための測量の技術が大きな転機を迎えたことに注目し、その転機はなぜ起こったかということで、その大きな原動力としての社会と空間の関わりを考えたいと思います。人間と土地の関わり方を見ると帰属が曖昧な区域を挟みながら、部分的に治めるとか使うということをしてきた形であったものが、生産力や人口が増えるに従って、それぞれの居住圏なり勢力圏が拡大していき、お互いに境を接するようになると、

それをどう確定し、どう保持していくかということが厳しい問題になってきます。そのために位置の正確な地図が必要になり、測地測量を行い、より正確に緯度と経度で位置を表すという方法が追求されることとなります。正確な測量を可能にする三角測量の原理は、地図作製者のゲンマ・フリシウスという人が発表しました。また、正確な時計のない時代には、経度を測ることが困難でした。そこで、イギリスの下院に 1737 年に経度委員会というのができ、ここで賞金を出して正確な時計が作られました。経度委員会まで作った背景には、国として植民地を獲得するという意思がみられます。その出来上がったクロノメーターを使って、James Cook が探検をして、太平洋の地図を作っていきます。この時、出かけていく対象が海になったということで、経度を決めるということが、陸よりなお重要になってきます。こうして測地学の確立、クロノメーターの発明と並行して測量をするための機器も精密になってきました。この間の動きを「Reformation of Cartography」、「地図学の改革」と呼んでいます。こういうものを経て、現代の地図の基盤が成立しました。その後、20 世紀の半ばくらいまでは、徐々に変わっていくという感じだったのですが、第二次大戦を境に、再び地図の激動期がやってきます。測量に空中写真を使う、あるいはレーザー光線などを使って距離の測定を電子的に行うことで、素早く正確になる。あるいは、地図の印刷技術の変化など、地図学の大激動がございました。先ほどお話しした地図学会の成立などもこれに連動するものと思われまます。

現代は、電子時代に大転換をしております。これは、前の転換期を上回る劇的な変化です。地図というのは今まで「もの」だったのですけれども、その「もの」性がなくなってきたということで、地図の考え方も変えていかなければいけないのかなと思っております。また、地図と受け手の問題というのが現代の中でどう考えられていくのかということも興味があります。本日も空間把握をするということから始めましたけれども、あまりにもデータが多くて、しかも未加工の形でデータが提供されて、自分で加工して、自分で可視化するということになる。技術がないと自分の近く出来る範囲より広い空間は漠然としていた昔の状態の様になってしまうのではないかと年配者としては不安を感じることもあります。それから電子的データが、よく言われることですけれど、後代にどういう形で伝えていけるのかということも、図書館で仕事をしていた身としては考えるところです。ちょっと大事なところをはしょってしまいましたけれども、これで終わらせていただきます。

5. 尾関憲一氏講演：「『ブラタモリ』で見えてきた都市の秘密 — “まち歩き番組” 制作と古地図の関係 —

NHK の制作局からやってまいりました。プロデューサーの尾関憲一と申します。どうぞよろしくお願い致します。



僕の所属している部署は制作局のエンターテインメント番組部というところで、そこでプロデューサーという仕事をしております。NHKでは番組ごとに一人プロデューサーがいて、複数名のディレクターがローテーションしながら担当していくという形になっています。ブラタモリもその形でやっており

まして、プロデューサーの私は、全てのネタの打ち合わせを行い把握して、ロケ現場にいて、編集にも立ちあっています。たくさんの方がいて番組は成り立っていますが、今回はその番組の背景ということで、私とその番組チームを代表してお話をさせていただこうと思ってまいりました。

ブラタモリという番組が、そもそもどういうふうにして出来たのかについてですが、これは2008年が最初で、NHKで夜10時代の新しい番組の企画を募集する中で出てきたものです。最初はタモリさんに3億円事件にまつわる土地をたどってもらおうというもので『タモリの時空ウォーカー』として提案表を出しました。それをシリーズ化できるようなものに近づけていったのが、今のブラタモリの原型のような形です。最初に提案書に書いたのは、明治神宮や表参道を取り上げて、まちあるきしようというスタイルの番組でした。まちあるきや紀行番組がたくさんある中で違うものをとということで、大きく決めていたのが観光地をめぐるらない、そしてお店に入って食べて、おいしかったと言う流れにしない、ということです。そうしたものはらって、まちあるきをするというスタイルで新しさを出せないかと思ってやりました。

まず一本だけやってみるということで、明治神宮が人工の森であるという話、そしてそこに参拝する参道として表参道が作られたこと、神宮の中にある湧水から流れ出た水が竹下通りを通過して、その裏のブラムスの小怪、キャットストリートを通過して渋谷駅のほうに流れてくれている、その川に蓋をして暗渠としている、というような話を取り上げました。すると非常に反響が大きくて、深夜なのになかなか視聴率がよかったです。そこで、これをシリーズ化し番組にしたのがブラタモリの第一シリーズということになります。それが2009年の10月から半年間のシリーズでした。その最初の回は、タモリさんの母校でもある早稲田の街を選びました。番組で大きく柱にしたのは、まちなかで普段見えているのに気付いていないものに気付いて、なにか面白い世界がその後ろに広がっているというパターン。そしてもう一つは、NHKが頼まないと入れないところに入りこむというのを番組のどこかに入れるということです。こうして、身近なものや普段入れないところを組み合わせることで番組にしていきました。ここで早稲田の回の一部を6、7分ぐらい見ていただこうと思います。造園家の涌井先生という方と、NHKの久保田祐佳アナウンサーと一緒に神田川べりを歩いています。あることを発見してちょっと話をするというくだりが、基本的にその後のブラタモリにも生きている部分です。ちょっとご覧いただいて、またお話をしようと思います。

(※映像 神田川沿いに並んで立つ街灯の柱のプレートの表記を見ると、不思議なことに気づく。同じ川縁の街灯なのに、数メートルおきに「豊島区」「新宿区」「豊島区」のものが並んでいる。いったいなぜ・・・？ 通りがかった人や近所の人に聞きながら、最後は古地図で確認してみると、かつてはこの場所で大きく蛇行していた神田川が区界（くざかい）になっていたことが判明。その後、洪水対策の河川改修でまっすぐな川にしてしまったが区界は昔のまま。川の縁に「飛び地」のように区界が残っているため、街灯も不思議な配列に・・・)

はい。ありがとうございます。こういう感じに進んでいきます。

私たちは台本を作りますが、制作スタッフと技術スタッフだけが見ていて、タモリさん久保田さんには一切見せていません。歩く時にここからあっちへ歩いてください、街灯だけ気にしてくださいとだけ言って撮り始めていく、そのままアドリブになっていくという流れです。普通、番組だと最初に何かに気づいた時、テンポをあげるためにポンと切って説明にいくのですが、ブラタモリの違うところは、なんだこれ、と気づいた時に元の場所へ戻ったりする動きをカットしないで撮ることで、僕らが普通にまちあるきする時のリズムや、リアルに現場で発見しているその時間の流れをとどめようと思って編集しています。ですので、まず街灯が変なふうに並んでいることを確認できた、と。その後よくあるのは、検索して答えがスポンとでてくる。僕はただそれだけではつまらないなと思っているので、なんだろうと思った時に自分だったら昔どうしていたかなと思うと、本で調べたり、誰かに聞いたりしたんです。そこで番組でも通りかかった人に聞きましようと言って、本当にたまたま通りかかったおばさんに聞いています。そうやって聞いていくと、区界というキーワードがでてきた、と。何故区界がそうなっているのかというところで、今度は地図をひろげて調べていく、蛇行している、もしかしてこれじゃないか、というところまでいって説明に入ってこっちで撮っていく。このような流れで、思考のプロセスが見える形で番組にとどめようとすごく意識しました。僕も検索文化のいいところと悪いところがあると思うのですが、なんだろうと思った時に答えを得ようとしすぎているなと思うことがあります。疑問に感じた時、自分で考えたり推測したり、調べていくことはすごく面白いし、そうやって分かったことは身に付くと思うのです。なので、番組でもそういうことを意識していました。それから、まちをこのように見ていくと何かあるということ、他の場所にも応用できると思っているので、番組ではまちの見方のヒントをばらばらと散りばめているという感じで作っていました。

最初からこのようなテンポでやっていたのですが、初期の頃はあの女性アナウンサーは何故何も知らないのかという意見がたくさんきました。僕たちはどういう人がタモリさんと組み合わせさせて歩いたら面白いのかなと、タレントさんも含めて考えたのですが、他の番組でもタモリさんは他の人をたてるためにひっこんでしまう。タモリさんになるべくたくさん話してもらうためにも、あまり知らない人の方がいいと思って、NHKのアナウンス室と交

渉して出てきたのが久保田の名前でした。番組をやる時に、彼女には予習をせずにあなたの年齢なりの女性の普通のリアクションをしてほしいとお願いしました。彼女はそれを忠実に実行しているだけなのです。その結果、最初はその人は何も知らなすぎる、変えてほしいというリクエストがきたのですが、シリーズを続けるうちに最後にはあの二人を絶対次も組ませてほしいという意見に変わってきて、これは僕たちも曲げなくてよかったと思ったポイントです。番組ではマニアックなネタがでてくるので、そこに一般目線をいれて、素人目線でマニアックなものを砕いていくことを意識していました。このような感じで、古地図をひろげることがきっかけになるというシーンを毎回入れながら、古地図を持って現代のまちを歩くと見えてくるものを意識して番組を作っていました。ここで、もう一つ「新宿の水道編」という回の一部だけご覧いただきます。

(※映像 新宿高層ビル街の場所は、かつては巨大な浄水場。戦時中は、大切な水源・浄水場を守るために、そこが普通の池や公園であるかのように偽装した地図が出ていたことなど紹介)

はい。ありがとうございました。番組では、このような形で地図を使っています。

この番組をやってから、今日の地図のことだけでなく地理、歴史、都市計画、土木など様々なところから声をかけていただいて、こういう話をしています。もともと専門的なジャンルなので、分かっている人には面白いのですが、テレビでその専門性をかみ砕いて、面白く見せるプロセスを工夫することによって、本来興味のない人までその世界に惹きつけることができるのではないかとテレビの力を再認識しました。僕自身は、地図や地理の専門家でもないのですが、専門性の面白さがなかなか専門家では出しにくい、それをテレビで一回かみ砕いて、見せ方を工夫することで何か面白く見せられるということがあるのかなと、僕自身気づいたりしております。

このような話でしたらまた色々できますので、お声がけいただければ参上します。よろしくお願い致します。

これからもNHK、およびNHKの番組をどうぞご贖頂に。ありがとうございました。

6. パネルディスカッション・質疑応答

春谷：それではパネルディスカッション「社会が変える地図、わたしたちを変えよう」を始めます。ゲストには柴崎亮介先生、鈴木純子先生、尾関憲一様をお迎えし、コーディネーターとして文化資源学研究専攻修士一年志田康宏を加えてディスカッションを進めます。よろしくお願いいたします。

志田：文化資源学研究専攻修士課程1年の志田康宏と申します。パネルディスカッションは、まずタイトルについて僕の方から説明をさせていただきます。

して、その後パネラーの皆様は僕の方から質問をさせていただき、最後に質疑応答の時間を取らせていただきたいと思います。



パネルディスカッションのタイトル「社会が変える地図、わたしたちを変える地図」というのは、地図というのは社会の変化やニーズによって変化していくものということ、そして時代や社会の要請によって地図が変化していくということです。例えばカーナビの出現がもたらしたような私たちの身体性と空間認識の変化のように、地図の変化で我々の体の動かし方それから世の中をどう捉えるかという意識も変わってきます。そしてフォーラムのタイトル「地図×社会×未来」ですが、私たちの調査の中で浮かび上がった3つのキーワードをつないだものです。「×」でつなぐことで、お互いの相乗効果によって何倍にも実態や方向性が拡がっていくということを表そうとしました。地図について考えようとした時に、地図がこんなに進化しているという現状、あるいはいかに変化していくんだらうと地図の未来を考えるということは要するに未来の社会を考えることなんじゃないかと思うようになったということです。これがフォーラムのタイトルになっております。

志田：社会の変化で地図が変わる、地図が変わって社会（わたしたち）が変わるということについてどのようにお考えでしょうか。

鈴木先生：いろいろな技術が開発されても、技術だけでは地図は変わらなくて、需要や必要がうまれてはじめて形になるものだと思います。あとは、道案内っていうのは地図のほんの一部分の姿ですから、地図を通してどうやって社会を見ていくかというところに問題意識を持って地図を見ていく。そして私たちが地図によってどう変わるかはまだこれからの課題かなという風に思っています。ただやっぱりあまりにもめまぐるしい地図の変化になかなかついていきにくい、便利だなと思う一方、全体を見てその中から情報を探し出してくるという感性が抜けていきそうな気がします。ピンポイントの情報と別に視点を変えることによって見えてくるものがあって。そのへんを注意して地図に向かっていきたいと考えます。

尾関さん：地図のイメージって、未知の世界が入っている情報みたいな印象が小さい頃からあって。古い本を開いてパラパラめくったら謎の地図が一枚出てきてそれを解いていくとそこに宝があるみたいなものって昔はありましたけど今はあんまりそういうロマンやミステリーがないような気がするんです。知らないことが書いてあるのが地図だったような印象があるのに、最近の地図を見ると、知っていることをどう表現するかっていう見方でみんなが地図を見てるような気がします。全部世界が見えちゃったから地図の神秘性が薄れて、ちょっと意味が違ってきてるのかなっていうような気がしますね。そ

ういう風に地図の神秘性っていうか、未知な感じが変わったかなっていう印象を僕は持っています。

柴崎先生：今って GPS だとかスマートフォンで非常に精度よく位置がわかりますよね。しかもデータはデジタルでみんなネットワークに繋がっているんで、取ったデータを地図に載せるっていうのはいくらでもできます。確かにこれまでの地図のイメージって国とか自治体で作ってぼくらがそれを使うってイメージだったのですが、実際作る現場でもみんな GPS で取って作っているし。自分で新しく家建てたので、地図に載っていないから勝手に地図に書きますよって言ってやって



くれれば、地図を更新するのもとっても楽ですよ。だからみんなが家を建てたりする度に地図に書いていくと、今まちはこんな風になっています、というのがすぐわかります。未来となると、10 年後には必ずここにビル建えます！といった、みんなの夢を載せてもよいわけで、そういう意味でも未来に繋がります。あとはみんなの家の建て方見ていて、この街は一見高級住宅街だけど、もうみんな年取ってしまい空き家もぼちぼち出はじめて、これって大丈夫かい、っていうようなこともわかってくる。だから未来を変えていかなくではいけないっていう風にも使えるようになってきている。そう言う意味で、社会が今どうなっているとか、これからどう変えたいかという考えが集まった結果として物事が変わっていくのですが、まさに今は地図を使ってみんなが現在について、あるいは未来についてコミュニケーションできる、そんな時代になりつつあるのかな。だからまさに「地図×社会×未来」とかっていうのがすごくタイムリーなキーワードだなという風に思っています。

志田：ありがとうございます。今回、柴崎先生でありますとか、モバイル業界でライターをされているような、デジタルテクノロジーを扱っている方々にお話を伺っていてご自身の活動と地図というものの間にちょっと距離感を持っていらっしゃるなということが印象的だったんです。僕ら素人が考える最先端の地図とか、地図の未来的な姿ってすごくモバイルだしすごくデジタルだからそれが衝撃的だったんです。そういったデジタルテクノロジー開発と地図との距離感みたいなものはどのようにお考えでしょうか？

柴崎先生：「距離感」という話は確かにとても微妙で、僕らの年代ってトランジションの期間だと思います。デジタルなデータの話とかを考えると、やっぱりまだ地図って紙のイメージをすごく引きずっていて、そういう時に地図ですって言うと、GPS なんかもそうなのですが、それがうまく伝わらない感じがするんですね。そうしたギャップ感が「いや、僕のやっている話は地図じゃないんですけど」とかになる。だからそうしたトランジションの年代が終わると、「これが地図っていうもので、みんながいろんな見方ができて

面白いよね、紙にプリントして持ってもとても楽しいし」、っていう風になり、全くイメージが変わってくるのかなと思います。

志田：鈴木先生は柴崎先生のご講演をどのように受け止められましたか？

鈴木先生：地図は人は書かないんですね。ただ絶対全然書かないかっていうと、昔の東海道分間絵図とか鋏形蕙斎の鳥瞰図とかを見ると、無数の人間が江戸のまちの中を歩いているんですね。それから駕籠や飛脚や馬がいたりたくさん人間が書かれていますので全然人間が描かれた地図がないわけではないんです。けれども一般にはやっぱり地図は動く人間は描いてこなかったんです。柴崎先生の GPS を使って動く人間まであらわす地図は非常に重要な貴重な情報なんだろうと思いますけれども、やっぱりちょっと固定した私の古い地図観念だと、、、うーん（笑）というふうに、これからこういうことをしっかり考えなければいけないなと思っています。やっぱり”つなぎめ”をどういうふうに考えていくか、私は紙地図で育ってきまして、同世代のみなさんよりはややそういうものに親近感を持っていると思うんですけども、それでもなおやっぱり物でない不安というのは非常に大きいというところがあります。

柴崎先生：今風の絵地図なんですね、アニメ地図といってもいいのかしら。あれを見ると「今ここがすごく賑わっているよ」というのが絵地図に描いてあるみたいな感じなのかもしれませんね。

尾関さん：僕が思ったのは、動いているとかああいう世界って、アニメとかの表現の中ではあったなと思って。昔の映画とかアニメとかだと、総合司令室みたいなのがあってみんな「見てみよう」って言って「ビビビビビ」って動くっていう、その未来が現実になっているなという感じはすごくしました。今はできないけどすごい技術っていう意識があった地図、それが技術によって出来るようになったっていう、すごい技術の象徴でしたよね、地図を動かすって。

鈴木先生：コロンブスがアジアへの道を探して西へ西へ航海していくんですが、アニメがないので、地図上に点々と何月何日というふうに描き表したっていう地図表現があるんですね。それは現状を見通しているというかそのベースになるというか。だから要求はちょっとあったっていうことを思いました。

尾関さん：「ブラタモリ」でも、浜離宮に江戸時代に本物のゾウがいたことを紹介しています。そのゾウを南の国から船で長崎に連れてきて、それを浜離宮まで運んできた地図っていうのがあって、地図上に日にちがゾウの絵と点々と書いてあるのがあったので、それも昔で言うと動く地図みたいな感じかなという気がしますね。

志田：紙の地図とデジタルな地図と大きく分けるとして、その使い方の違いについて世代によって使い方が違うよねという話を尾関さんの体験談からお聞かせください。

尾関さん：10代や20代の世代が地図を地図帳で見ないでスマホでしか見ないなと思って。NHKの研修センターで新人のディレクターの研修があつてですね、僕も先生として指導したんですが、ロケに行くとか場所探すとか言っても必ずみんなスマホで見るんですね。自分の位置を中心に周囲少しを見てるだけっていう地図の見方をする。で、彼らも「ブラタモリ」見てくれてたとかいう話を聞くと、街中で地図を広げてる画がおもしろいですよね、って言った人がいるんですね。ああ、これがもうそういう新鮮な捉え方をされるようになってるのかっていうのは僕はちょっとびっくりして。もちろん便利でいいんでしょうし、Google Earthなんかで地図みたいなものを見て楽しんで何時間も見ちゃうみたいな動きがある一方で、手元周辺については自分の位置が今わかんなくてもこれがあればすぐ調べられるみたいな空間認識をしてるのは、僕の世代とは違うのかなって感じましたね。

志田：例えばデジタルみたいなキーワードで地図が大きく変化してきたのって多分ここ20年くらいかなと思ってのんですが、ここ数十年の地図の変化についてどのようにお考えでしょうか。

鈴木先生：そうですね、いや～変わったなあというのが（笑）正直なところ。地図の上に盛り込まれる情報が従来の地図の土地を描くというところから”人”なり、その上に乗せられているすべてのものに拡大されたというか。方法として動くものをどう地図に載せるかということがあまりに速く入り込んできているものですから、固定した地図のイメージっていうのがなかなか持ちにくくなっているという感想ですね。私はやっぱり地図は基本的には一定の大画面の中に物が詰まっているという使い方がずっと慣れ親しんできた使い方なので、必要な情報だけをそこから得たいというよりは、むしろ全体の中でどうなっているかという視野が私には馴染んでいるので、そのへんでちょっと違和感を感じますが、ただ世の中がそれを要求しているんだと思うので、そのバランスをどう作っていくかっていうことが、まだまだ一足飛びに変わらないで、考えながら進んでいって欲しいなという風に思っています。

柴崎先生：今はやっぱり過渡期だと思います。デジタルの地図ってとても便利ですけど、画面の大きさからするとほんとにごく限られたところしか見られないので、ある意味不便ですよ。自分の位置と全体像との位置関係を見ようとするとスマホでもタブレットでも全然ダメで、やっぱり紙を広げて見られるというのがよくて。できたら丸めるぐらいの電子ペーパーで、4Kぐらいで、広げるとばあーっと出るなんていうのがあるとすごくいいですね。そこまで行くとようやくトランジションが終わったかなという気がしますね。

志田：紙の地図のいいところは見直さないといけないよねということになっていくんですかね。

柴崎先生：というか、やっぱりまだ紙に勝てないよねというところですね。ポスターや新聞がなくなったりしないのと似ていて、電子版というのは、ぱっと見てどこが重要かぱっとわかるとか、「ああ、こういうこともやっているんだな」とかいった発見が、ちょっと阻害されている感じがしますね。

志田：ここ数十年の地図の変化っていうのは年配の世代こそが敏感に感じているのではないかと思うんです。「まちあるき」ブームを支えている世代もそうらしいんです。尾関さん、番組に対する反応の中で、世代によって反応が違うみたいなことってあるんでしょうか。



尾関さん：「ブラタモリ」って若い世代も見ていますよ。NHK の番組を見ている方って、基本的にはどうしても高齢層が多いんですけど、10～30 代、女性も見ていたりするんですね。NHK の番組の中ではとても変わった傾向です。高齢者の方は昔の史跡巡りとか歴史巡りの感じを引きずったまちあるきをしてる。若い人は地形に着目したり、変化したなにかの痕跡を、っていうブラタモリでやっているような歩き方をしているっていうのがすごい感じます。同じまちあるきでもちょっと視点が変わってきていて、そういう若い人の動きを少し上の人も面白いなと思ってやりはじめているっていうそんな印象を僕は持ちますね。

鈴木先生：もともと私は地理の出身でして、地形学大好きで、という人間です。大変興味を持って「ブラタモリ」は見せていただいております。地図の中にこんな情報があるよっていうことをふっと気づかせてくれるような見せ方で、地図界にとっても大変ありがたいなというふうに思っております（笑）。

柴崎先生：地図でパッと見えるところだけ取り上げるのではなくて、昔にさかのぼって、昔を紐解くというか、あるいはまちのダイナミズムを見ていくというのが、すごく楽しいです。たとえばデジタルデータを検索する第三のキャラクターがいるとか、下水管とかって歴史的にああだからこんなところ入っているんだねとか、そういうのも面白いかなとか思っているんです。そういう意味の過去のほじくり返し方っていうのも、あるかもしれませんよね。

志田：最後に、震災によって地図が変わったあるいは地図に求められるものが変わったということをどのようにお感じになられているかということをお伺いしたいです。

鈴木先生：電子データを使う地図の意味合いが震災では非常にクローズアップされたし、そういう面での力はすごいもんだなと思いました。どこにでも最新情報が送れるし紙の地図を作っていたのではとても急場に間に合わないというところがそれによって随分埋められた、非常に甚大な影響と言うか動きを加速させるというか、みなさんの認識が深まるという面はあったと思います。古い地図に関して言えば古い災害の様子が意外に地図に残っているという面もあります。よく話題になりました液状化現象における土地の履歴の研究ですとか、情報として古い地図が役に立つとかいう意味では震災と地図の関係は非常に大きいと思います。



柴崎先生：やっぱりこの震災を契機にデジタルの地図とか使い方って革命的に変わったと思います。今は全部衛星が基準なので、地表面が伸びたり縮んだり、盛り上がったたりへこんだりっていうのは、いくらでもリアルタイムにモニタリングできます。カーナビのデータで「どこの道は走れたよ」っていうようなものが毎日毎日集まって、そのおかげでデータが世の中に公開されて、大震災のあとどこの道が通行可能かすぐわかるようになりました。こうした活動はあの後ちゃんとルール化されて、震度6以上で発動するといったような基準がもうあるんですね。そのルールを満たす災害があれば、自動的にみんなデータを出すという社会的な合意ができたという意味で、非常に大きいと思います。もうひとつの側面は sinsai.info とか、みんなが投稿するテキストの情報がどんどんリアルタイムで地図に載る。それも、市民のボランティアでちゃんと専門経験のある人が何十人か束になってやればもうかなりできるよということが実証された。まさにみんなで地図作り始めるというのが、本当に形になり、かつ、その情報をみんながシェアするということで、情報をそこに集約することで可能になったっていうのがやっぱりすごいことだと思います。

尾関さん：震災以降って地名の由来とかの本が続々と出ていますよね。足元の土地がどういう土地であったかってことをみんな自分でもう一回見はじめてるなという印象はすごいあって。地理的条件で自分の住む場所を見つめ直した感じはしますよね。それまでって都心だと不動産物件の雰囲気土地を見ていた感じがします。まちの名前のイメージと部屋の間取りとか。それがどこのどういう地形に立っているのかということも、もう一回専門家じゃない人が見始めてるっていうのは、僕はすごいその影響かなって感じがしますね。あと、余談ですけど「ブラタモリ」東京タワー・芝編っていうのを3月10日に放送して翌日が地震だったんですね。それを見て翌日東京タワーに観光に行っていた人たちがいたんです。番組のために出かけて何か被害に遭われた方がいると大変だと心配しました。それでそのあとそういうところに行っていた人から何件か番組宛てにメールが来てですね、番組を見て東京タワーに行っている時に揺れましたと。そしたらエレベーターが全部止まってしま

いました。で、たまたま番組中で紹介していた普段使えない非常階段を使って降りることができたらしいんです。番組のおかげで非常に貴重な体験が出来ましたっていう（会場笑）。そんなことが地震の時にあって、そんなことも覚えています。余談でした。



志田：ありがとうございます。ちょっと時間の方が押しておりますのでこのあたりでディスカッションを終わらせていただいて、会場の方から質問を受けたいと思います。質問のある方は挙手をお願いします。

質問者 1「尾関さんが講演で話されていた NHK だと入れてもらえるけれど、民放だと入れないということについて、もう少し具体例とかを教えてください。」

尾関さん「今日ご紹介したのは、身近なところにも裏に秘密があるみたいなところで、スペクタクルシーンを入れていないのですけれど、例えば、迎賓館にバラエティ的な番組で入ったのは初めてだったそうです。あとイタリア大使館の中の日本庭園。江戸時代の松平家の屋敷跡のものですが、江戸の姿を残しているという庭園を見せていただきました。これも大使館に入る機会があれば見せてもらえるのですけれど、取材ではなかなか入れてもらえない所です。地下鉄では色々な幻の駅に入りましたが、東京メトロの方が番組のファンで協力していただきました。羽田空港のD滑路という新しく海の上にした滑走路の下にも入れてもらいました。ここは、滑走路の構造が見えるようになっているのです。鉄筋で組まれて小部屋がいっぱい並んでいて、そこにエアコンがたくさん付いています。中を錆びさせないためだそうです。「こんなエアコンを付けて無駄じゃないですか？」って言ったら、「これがなくて錆びてしまったら、それを直す方にお金がかかる」と。ただ、どのくらいの数があるとか、中がどう広いかを見せることは、テロ対策としてNG だそうです。こういったセキュリティに関わる所はガードが堅かったりします。あと普段は非公開の浅草の伝法院というお寺、そこにも都心にしては非常にいい日本庭園があるのですが、タモリさんの希望もあって見せてもらいました。そこの住職さんは、自分が池から掘り出した貝を貴重な貝だと

思うので、ぜひタモリさんに見せたいとおっしゃっていたのですが、実際にタモリさんもすごく反応していて、後で番組でも調べたら、縄文時代の貝でした。他にもいろいろありますが、このくらいで。」

質問者 2「地図の表現手法で、等高線に苦労している方が多いのではないかと思います。今、地形に興味を持たれる方が多いのには、3Dの表現が増えてきたというのもあるかと思っております。等高線から開放と言うのもちょっと変なのですが、そのあたりについて柴崎先生、尾関さんに一言お願いします。」

柴崎先生「等高線も局所的なものは慣れれば分かるのですが、ヒマラヤ山脈のエベレストの周りの等高線とか見せられて三次元の絵が頭に浮かぶかという、それはかなり厳しいですね。デジタルデータのいいところは、まさにそういうところで、横から見たりもできるし、太陽を出して陰影をつけるとか、いろんな方法があります。そうなってくると、等高線って試験に出るからやる、となってくる可能性はあると思います。それがいいかどうかはわかりませんが。」

尾関さん「番組の中でも平面じゃだめなので、立体にした地図を出したりします。やはり高低差を強調します。等高線ではわからない魅力が立体にすると思わるとは思いますが、それはアナログな方向に戻っているということで、僕も答えは出ません。ただ、神田の南洋堂さんという本屋さんにプロジェクションマッピングという白い立体石膏地図があります。そういう立体のものにデータを投射する。東京駅でも話題になりましたよね。3D物体に対応するような映像をそこに映すことで、何かを表現するというのはおもしろいと思っています。ただそれはその現場で見ないとおもしろくなくて、テレビではCG映像みたいになってしまいます。テレビでは出来ないことをやっていると思いました。地図の世界も何でもデジタルに行かずに、デジタルを使っているけど、アナログっぽい表現のような、そういう可能性があるのかなと感じたことがあります。」

質問者 3「私は昭和 14 年生まれですから、タモリよりももうちょっと年上で、アナログの時代に育っています。今、アナログの地図に危機感を持っています。『一万分の一地形図』がもう作られていないのです。さっきお話しがあった渋谷も在庫がありません。また、日本には源氏物語絵巻だとか、広重だとか、吉田初三郎とか鳥瞰図の歴史があるのです。日本独自のものもかなりあると思います。今は浅草に立川博章さんって方もおいでになる。そういう日本の伝統を活かしたアナログの世界も見直していただけるとありがたいと思います。」

質問者 4「柴崎先生にお聞きしたいのですが、今回見せていただいたデータは、一年のデータを慣らして、平均化して図示していたと思うのですが、特定の天候や季節的な変化あるいは地形によって、人の動きのパターンが通年として変わっていくのではないかなと想像しました。そういった研究状況をお聞かせください。」

柴崎先生「いい質問をありがとうございます。現在は、天候によってちょっと影響があるらしいよという位がわかっている程度です。ああいうデータが出始めたのもこの一年ぐらいなのです。地形とか、気象とかの影響は絶対にあるのですが、それがちゃんと出ると、『Science』クラスのジャーナルに載るのではないかという位です。また、最近よくビックデータと言いますが、あれは本当にデータ量が多くて大変です。だから、もし興味があるのでしたら、ぜひ一緒にやりませんか。データはとにかくあって、いろんな思いつきとか考えはあるのですが、私の周りにはそれを全部あたるだけの人もいないし。とてもおもしろいネタになると思います。」



質問者 5「今日のパネルディスカッションのタイトルなのですが、「社会を変える地図、私たちを変える地図」となっていますが、柴崎先生のお話を聞いて、私たちが地図を変えて、社会を変える地図を作れるのではないかと思いました。そこで、コーディネーターの方にお聞きしたいのですが、私たちを変える地図じゃなくて、柴崎先生のお話やみなさんのお話を聞いて、私たちが地図を変えられるのかというようなことを何か考えたかどうかということについてお聞かせください。」

志田「フォーラムを作るにあたって、いくつかキーワードを考えた時、「わたしたち」と「社会」の関係について考えました。直接置き換えることもできるかもしれませんが、「社会」というとあまりに大きな概念ですが、一個人が知覚できる範囲はもう少し小さい。それを「わたしたち」と捉えました。そして、例えば震災の時にデジタルな地図は電源が付かなかったとか、紙の方が携帯に良かったとかいうことで、今、どんどんハザードマップなどが出てきていますよね。そういったものも、地図をわたしたちが作った例の一つになり得るじゃないかなと思いました。地図の変化と社会の相互作用で地図がどんどん発展してくのだということが、このフォーラムのテーマでもあるので、ご指摘いただいた内容もこのタイトルには含まれていると思っています。」

質問者 6「鈴木先生のレジメに第二次大戦期から再度の激動という文字があるのですが、その時に何がおこったのか教えていただければと思います。」

鈴木先生「社会的な背景からいうと戦争だと思います。第二次大戦で各国が地図をたくさん作ります。その大量に作るという中から技術が激変する。いかに効率的に正確な地図を作るかということで、例えば飛行機を使った航空写真測量も本格的に行われたのは戦争期です。この時期の激変のキーワードは、戦争だと思います。」

質問者 7「鈴木先生に質問です。僕は修士課程の学生なのですが、指導している学部の学生が地図を読めなさすぎて困っています。地図の上の方が北だということも知りませんし、キャンパスの中の地図を使って、ここをまわってくるようにと指示しても全く帰って来ないということがありました。これは、僕の周りだけなのか、先生が所属していらっしゃる日本国際地図学会でも課題として取り扱われているのか、お聞きしたいと思いました。」

鈴木先生「そこまでのことは、初めて伺いました。ただ、地図の北が必ず上というのはほぼ最近のことで、江戸図は大体西が上になっています。また、地図を見て、地図を読んで動けるかどうかというのは、慣れでしょうか。ただちょっとショックですね。楽しいことをわかっただけであればいいと思うので、ブラタモリをおすすめになったらどうでしょうか。特効薬はわかりません。それは、スマホなどの使い慣れたメディアならわかるけど、紙だとわからないということなのではないでしょうか。」

質問者 7「こっちが北とか南とかというのを分からずに歩いている人が多いので、スマホの地図をみても、スマホが指示している方向と違う方向に行くという人はいると思います。」

鈴木先生「周りから判断することができないってことでしょうか。それはもう地図だけでは対応できないような気がします。お答えにならなくてすみません。」

質問者 8「先ほども出ましたけれど、今回のタイトルの「わたしたちを変える地図」を「わたしたちが変える地図」と考えてみると、地図を活かしてできることがもっとあるのではないかと思います。例えば、長期レンジで地図を使いながら情報を落としていくことによって、まちがいろんなふうに変わってきたとか、これからどんなふうに変わっていくのかということ予測するとかです。歴史が教えてくれるものは実はたくさんあって、それをきちっと地図に落とすことによって未来を予測する、あるいは未来を描くということかもしれないですが、そういう研究についてどう考えていかれるのかお聞かせください。」

柴崎先生「過去のトレンドを見て次を予測するというのはすごく重要で、リアルタイムなデータと過去のデータがあればとても強くだらうと思います。だから、昔のデータをずっとためて動きを見ていくっていうのは、とても大切だと思うのですが、そのためにわざわざ昔の地図を全部デジタル化して、重ねていくということに関しては、地図の会社でもなかなか稟議が通らない

状態のようです。例えば、ゼンリンでも地図がスキャンされて画像になっています。だから、あれをみんなで繋いで、デジタルデータ作るということを考えています。例えば、都市計画学会とか建築学会と一緒にやったらどうかとかいうようなことです。もう一つは電話帳を地図の上に重ねるということです。電話がないお店って、少なくとも昔はなかったと思うので、ほとんど全てのお店がいつ電話帳に載っていて、それをチェックしていれば、いつ消えたかというのが全部わかります。そういうのも繋ぎ合わせていくと、ものすごいデータができると思うのです。技術的にはやれるようになっているので、ぜひそういうことをいろんな所で言っていたら、学会などが動き出すといいのではないかと思います。」

鈴木先生「古い地図を見て移り変わりを考える研究は、いろいろな分野で蓄積はされていると思うのですが、土地の履歴などになると、もはや現存する紙の地図では追いつきません。地図の場合は、たまたまここにこういう地図があるということではしか読めませんが、どういう経緯でその土地でこの地図や絵図が必要とされ、作られてきたかという地図を取り巻く社会の状況などを読み取って行く中で、たった一枚の地図が非常に雄弁に語るということはあります。そういう意味では、古い紙の地図、残された紙の地図が貴重であるという価値は大変なものである、まさに地図は文化遺産だと思っております。」

尾関さん「僕は「熱中時間」っていう、マニアックな趣味の人ばかり集めた番組をやっていたのですが、予算つけて研究している学者は誰もいないようなことを、マニアがやっていて、そのデータが長期間残されて、研究者も参考にすることがありました。マニアックな人がのめり込むと、お金がつかない研究ができるのです。この世界でも学者だけじゃなくって、マニアを動かすことができるのではないのでしょうか。まちあるきとか、地形とか地図という分野は、研究者もいて、マニアもいるので活気があるのです。その辺もヒントがあるかなという気がしました。」

7. 閉会挨拶

小林真理准教授（東京大学大学院文化資源学研究専攻）

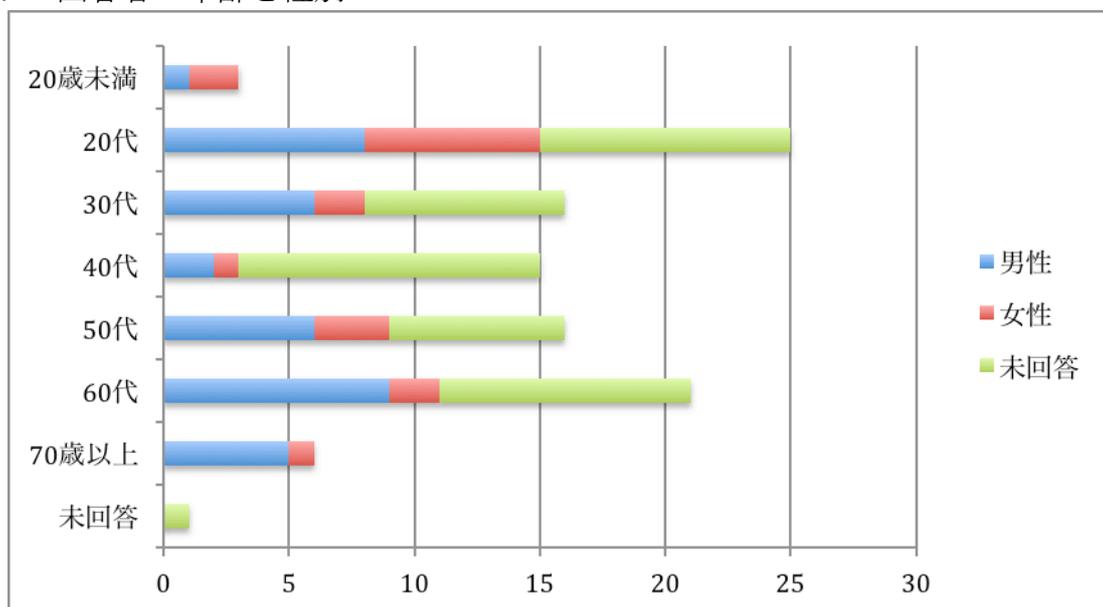
皆さん、今日は長時間にわたりご参加いただきありがとうございました。講師の方々、今日は本当に長い間ありがとうございました。とても興味深く面白くて、つい時間を忘れてしまうような内容だったと思います。最初の挨拶にありましたけれども、この企画は学生が一から立ちあげて、今日の運営もすべてやっているのですが、実はですね、私たち教員はここに至るまですごくハラハラさせられてきているわけですね。今日じつは志田くんがコーディネーターをしてくれましたけれども、ああいうふうにシンポジウムの内容にまで入って学生がやるようになったのは、たぶん去年からかなというふうに思うのですが、それまでは専門の先生方などをお呼びして、あとは教員が入ってやるという形になっていたと思いますけれども、今日のようにコーディネーターに質問がくるというのは、私はすごくドキドキしてしまいまし

た。けれども学生にとってはいい経験になったのではないかなと思います。また来年になると新しい学生が入ってきて新しい企画で新しい文化資源学フォーラムをすることになります。ぜひ来年も皆さんに来ていただきたいなと思います。本日はどうもありがとうございました。

IV. アンケート報告

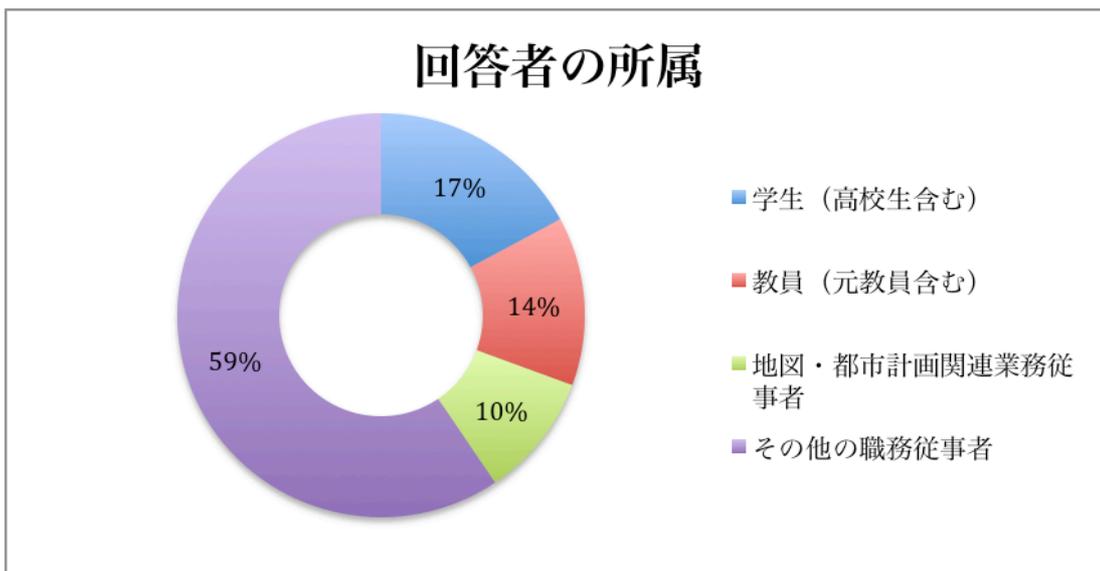
今回のフォーラムでは、来場者にアンケート（アンケート用紙は資料 1 を参照）協力をお願いを行い、回収率は 70%（103 枚）であった。

i. 回答者の年齢と性別



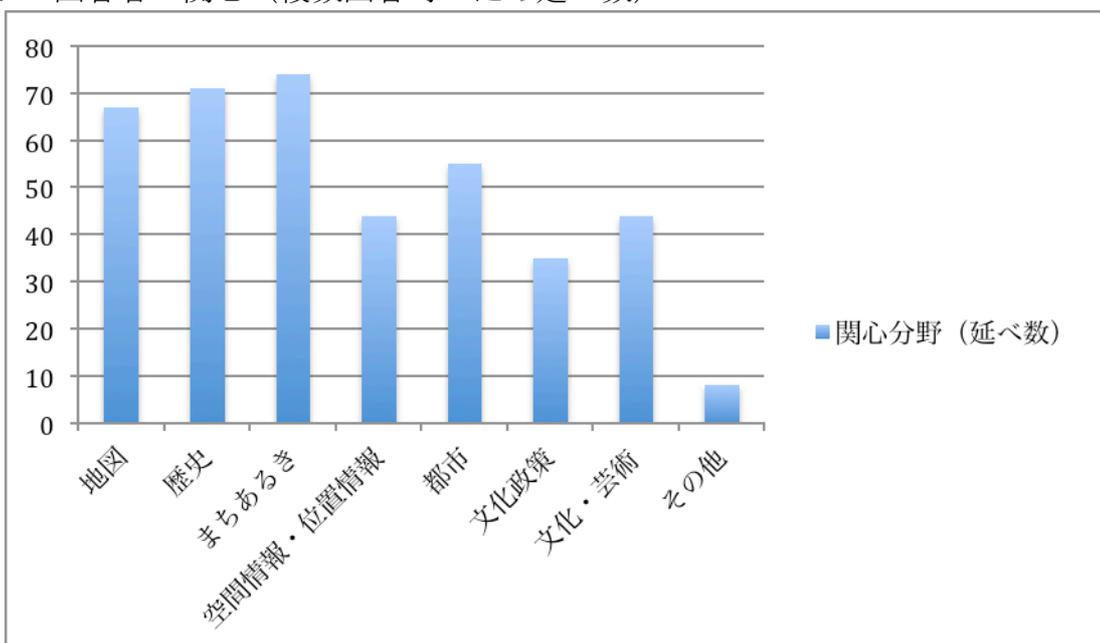
今回は土曜日にフォーラムを実施したため、幅広い年代の方にお越し頂く事が出来た。性別については、アンケート用紙のチェック欄の設置場所が不明瞭であったと考えられ、回答率は 5 割に留まった。男女比は 2 : 1 で、会場内を目視した際にも同程度の割合に思われた。地図というテーマに対する性別による関心の度合いの違いが見受けられると言えるだろう。

ii. 回答者の所属



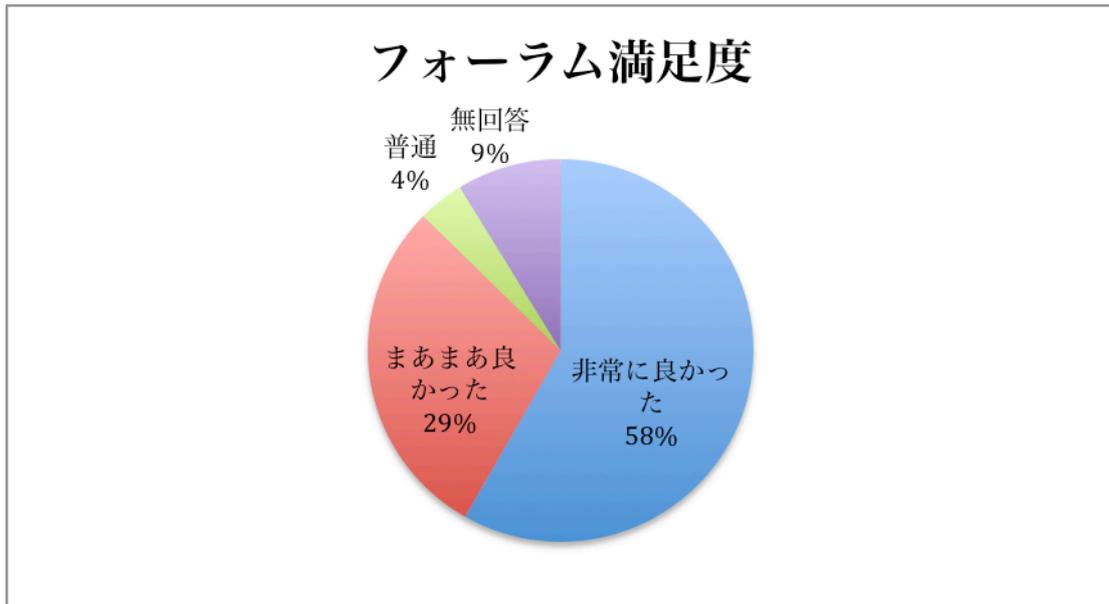
回答者の属性から、今回のフォーラムは地図研究者や専門家に限らず、開かれたフォーラムであったことが分かったと共に、地図やまちあるきなどに対する現代社会全体の関心の高さが伺える。

iii. 回答者の関心（複数回答可のため延べ数）



来場者が具体的にどのようなことに関心をお持ちなのかについて、「地図」「歴史」「まちあるき」というキーワードに6割以上の方が反応を示していることが分かった。このことは、来場理由として「フォーラムのタイトル・内容に興味があった」が最も挙げられた（複数回答可の設問で約9割の人が回答）という調査結果とも合致する。

iv. フォーラムについて



「良かった」というご回答が全体の8割強を占めたことから、成功裏にフォーラム本番を終える事が出来たと言えよう。以下、頂いたご意見・ご感想について幾つか紹介したい。

v. 内容についての感想

自由回答欄にも関わらず7割に近いご回答を頂き、長丁場にお付き合い頂いた皆様の興味に改めて触れる事が出来た。

- GPS データから様々な事が予測可能というのが興味深く、またビックデータ処理の重要性を感じた。
- 地図の歴史は興味深く、時間があればもっと聞きたかった。
- ブラタモリのお話が聞けたのが興味深かった。

などといった3名の登壇者による刺激的な発表についての関心の高さが伺えたのは勿論のこと、フォーラム全体の構成や内容から見える本企画の要旨について言及頂いた回答も多く、企画側として大変有り難く拝読した。以下、その一部を抜粋したい。

- IT 技術の進化によって「地図」の概念が転換している時期であり、テーマも発表・ディスカッションも刺激的で、好企画だと思った。
- (世代・専門分野などの点で) パネリストの人選が面白かった。
- パネリストの方々の視点の違いが地図というテーマの多様性をよく反映していたと思う。
- 学生発表の内容が整理されていたので、その後の講演に入っていくやすかった。視聴覚資料が充実していて良かった。
- 地図を介して社会を見る、この視点は新鮮だった。
- 地理、地図の魅力をどう伝えるかを考えるうえで大変参考になった。

また、議論に関して、より踏み込んだ御意見あるいは情報も頂く事が出来た。

- 固定的な地図に経時的変化の情報を加えることで、「もの」としての地図の「もの」という意味が遷移している時代性（文化の進化）を感じた。
- 「アースダイバー」ブームとまちあるきブームは、別々に流行したのか、それとも「考現学、路上観察学」の再興なのだろうか。
- 震災による紙の地図の見直しは、まだ一般化されていない認識なのではないかと思う。
- 地図を「つくる」という面では Google や Open Street Maps など、ユーザーが参加する動きがある。
- 紙とデジタルの話は、地図のみならず拡張できる話題かもしれない（例として辞書など）。
- 社会の要求や変化する地図によって人々が変わられるという視点に着目した今回の講演で、この変化に教育も変わる必要があると問題意識を抱いた。地図環境の変化が人々の空間認識に影響を与えるのであれば、子どもや若者がどのように地図と親しみをもち「生活」に役立てる力を身につけることができるかを考えなければならぬと思った。

内容についての改善点としては、以下の様な御意見を頂いた。

- デジタル地図をもっと知りたかった。
- 「未来」の部分がもっと展開できると良かった。
- 地図制作会社、美術関係、軍、都市計画、資源系（石油石炭天然ガスなど）の専門家のお話も聞きたかった。
- アナログ（紙）とデジタルの二極分化、アナログからデジタルへの進化という観点が強かったが、地図と他分野との関係性について触れてほしかった。
- 3人の講演の関連、三者とつらぬく問題意識が見えにくかった。
- 講演は非常に良かったがパネルディスカッションは焦点が絞れていないように感じた。
- パネリスト同士の議論があってもよかった。
- 地図について興味があつて来たが、研究者ではないのであまり興味をひかない話が冗長に続くことが多いと感じた。
- もっと内容を濃く、高度に、または専門度を表示してほしい。

vi. 運営についての感想

運営に関する自由記述欄では全体の約半数に当たるご回答を頂いたが、学生主体のフォーラム運営・進行に対し概ね好意的なご感想を頂く事が出来た。その上で、今後の教訓として頂いたご指摘を記載したい。

会場について

- 会場を暗くし過ぎて画面の光で目が痛かった。
- 一部講演中に画面に映像が無くなったのは残念。演出も考えて欲しい。

補助資料について

- 時間進行に表をつけてもらいたい。
- 休憩時間と注意事項を書いてほしい。
- レジユメ等の発表資料が手元にあれば講演の内容が頭に入り易いと思う。

- フォーラムの全体像を”地図化”した資料（図）があると、より深い理解、物事の関係が分かりやすかったと思う。
- 参加者限定でも参考資料、WEB 公開まであればもっといい。

進行について

- 受付の確認がもっと簡単にできるとよい。
- パネルディスカッションの前置きが少し長く、前置きと質問の関連も分かり辛かった。話し方がもう少し聞きとり易いと嬉しい。
- 質疑応答の時間が少なかったのが残念。

資料 1. 来場者アンケート用紙 (2013 年 2 月 16 日 (土) 配布・回収)

第 12 回文化資源学フォーラム 来場者アンケート	2013 年 2 月 16 日 (土)
東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究室	第 12 回文化資源学フォーラム実行委員会
Q1. ご来場にあたって	
I. 今回のフォーラムはどのように知りましたか？	
□ウェブ (具体的に :)
□メーリングリスト (□文化資源学関連 □その他 :)
□ポスター・チラシ (ご覧になった・手に取られた場所 :)
□その他 ()
II. ご来場された理由は何ですか？ (複数回答可)	
□フォーラムのタイトル・内容に興味があった	
□文化資源学・文化資源学研究室に興味があった	
□登壇するパネリストに興味があった (具体的に :)
□その他 ()
Q2. フォーラムについて	
I. 本日のフォーラムはいかがでしたか？	
□非常に良かった □まあまあ良かった □普通 □あまり良くなかった □悪かった	
II. 本フォーラムの内容について、ご感想をご自由にご記入ください。	
()
III. 本フォーラムの運営・進行について、ご意見をご自由にご記入ください。	
()
Q3. あなたご自身について、差し支えの無い範囲で教えてください。	
I. 年齢・性別	
□20 歳以下 □20 代 □30 代 □40 代 □50 代 □60 代 □70 歳以上 / □男性 □女性	
II. ご所属	
□学生 □大学教員 □地図関連企業勤務 □その他会社員 □その他 ()
III. ご関心のある分野 (複数回答可)	
□地図 □歴史 □まちあるき □空間情報・位置情報 □都市 □文化政策 □芸術	
□その他 ()
IV. 次回フォーラムの案内を希望される方は連絡先をご記入ください。	
頂いた個人情報他用途には使用致しません。	
氏名 :	
住所 : 〒	
メールアドレス :	
ご協力ありがとうございました。	

V. まとめ

i. 総括

1. フォーラムを終えて

本フォーラムは、地図の未来を見据えながら、現在の地図と社会、そしてその社会を生きる人との関わりについて考えようというものであった。フォーラムを終えてみて、最大の成果は、地図の作られ方、使われ方の両面において、今、地図は過渡期にあることが明らかとなったことであった。

とりわけ、地図作成における技術の進化には驚かされた。柴崎先生の講演で示された「動く地図」は、会場にいた大半の人にとって初めて目にするものであった。一見すると未来の地図のように見えるそれは、紛れもなく現在の地図である。鈴木先生の講演で示されたように、従来の地図は、静止したものであり、人が描かれることは少なかった。しかし、柴崎先生の示した地図には人の動きが示されている。それを可能にする技術が、今、あるということである。鈴木先生のお話にあったように、地図の長い歴史の中でも、幾度かの大きな変化があり、その変化を支える技術の進歩があった。しかし、地図は一方的な技術変化で変わるものではなく、それを要請する社会や人の存在によって変化していった。そう考えた時、尾関さんのお話から明らかとなった、いかに今、地図を手がかりに土地の記憶を楽しむ人たちが多いか、そうした番組への反応が大きいかということは、現在の地図をとりまく重要な要素の一つとなるだろう。

パネルディスカッションや質疑応答を通じて、パネルディスカッションのテーマでもある「社会が変える地図、わたしたちを変える地図」の具体的な要素がいくつも示された。鈴木先生がおっしゃったように、デジタルの地図をどのように後代に伝えるのかという課題もあるだろうし、柴崎先生が繰り返しおっしゃっているように、豊富すぎるデータを、いつ、どこで、誰が、どのように処理していくのかという問題もあるだろう。会場からの意見にあったように、伝統的な技術や、従来便利であったはずの紙媒体の地図の出版が、変化の中で消えていくのではないかという不安もある。背景には、地図会社の産業としての存続の問題なども含まれており、過渡期だからこその課題が多く提示された。そして、地図と社会の関わりについての一つの展望として、尾関さんからは「マニアと研究者の共存」という提案があった。地図を楽しんでいる人たちと地図を研究している人たちが、一緒になって地図の未来を支えるということである。未来の地図は、例えるならば現在の「ウィキペディア」のように情報が整理淘汰されないまでも、膨大な人の力によって少しずつ構築されていくものなのかもしれない。そして、それを支えるのは、地図を楽しむ人であり、地図を使う人たちである。そしてその変化がまた、われわれを変えていくのである。「社会が変える地図、わたしたちを変える地図」というテーマでスタートしたパネルディスカッションから見えてきたものは、「わたしたちが変える地図、社会を変える地図」の可能性であった。当然ながら両者は緊密な関係にある。

本フォーラムはこうした充実した議論が展開されたという意味でも成功であり、少なくとも現在と未来の地図に対する問題提起を行うことに成功したと自負しているところである。

2. コーディネーター（志田康宏）所感

コーディネーターとして、学生発表、講演、パネルディスカッション、質疑応答を通したひとつのストーリーを構築すること。僕に与えられた使命はそんな仕事だった。「フォーラムを通したひとつのストーリーをつくる」ということは早い時期から理解していたが、はじめから明確にこういうストーリーでないといけないという形が見えていたわけではなかった。おそらくいくつもの正解・不正解の形がある中でどんなストーリーが考えられるのか、学生主体のフォーラムであること、文化資源学フォーラムであること、2012年度というタイミングで、地図をテーマに取り上げることの意味と必要性など様々な状況に理由と意味を与えながら、作家が小説を書くときのような、ミュージシャンがアルバムの流れを決めるときのような、ぼんやりとしていた輪郭線を少しずつ見える形にしていく作業を進めていったのだった。結局僕の中のひとつの答えとして提出したフォーラム本番でのあの形が正解だったのかどうか、今でもよくわからない。もしかしたらずっとわからないままなのかもしれない。お褒めの言葉も頂かし、ご批判の声も頂いた。また自分自身の中でよくやったという達成感とまだまだ不十分だったという反省とが入り交じっているし、このフォーラムが結局歴史的にどんな意味を持つことになるのかが把握しきれていないところもある。それでも今回のフォーラムを一年通してこのメンバーでやり遂げることができたことがすごくよかったと感じていることは間違いない。

フォーラム終了後、いろいろな人が僕に話しかけてくださった。地図を扱った雑誌への記事執筆のお話もいただき、ご自身が関わっていらっしゃるプロジェクトに誘ってくださる方もいらっしゃった。これまで出会うことのなかった人々と出会うつながっていくことができたのだ。さらには、ご講演いただいたお三方同士はもちろん、興味関心を同じくする人々がこのフォーラムを通じて出会うつながっていく場面を幾度も目にすることができた。コーディネーターとは、企画と会場をまとめるだけでなく、それまで出会うことのなかった人と人とを結びつけていく貴重な役割も果たしているのだと、今は実感している。そして関わってくださった方々や当日ご来場いただいた方々の心に、なにかひとつでも種を残すことができたならば、それこそが本当にフォーラムの成功と言えるのではないだろうか。その種がどんな花となり実を結ぶかはわからないが、フォーラムそのものがわたしたちの一年間の成果を实らせるひとつの場であったと同時に、そこから多くの種を社会に播いていく場でもあったのではないかと、そう感じている。

一年間共に苦しみ喜びながら共に駆け抜けてくれた同期生の皆、関わっていただいた全ての方々に心より御礼を申し上げます。

ii. 編集後記：各メンバーより一言

チームでプロジェクトを動かす上で役割分担をバランスよく、できれば適材適所に配分することが大事だということが一番学べたのではないかと思う。一人では負担が大きいこと、特定の誰かがやらなければならないこと、みんなですること、誰がその任に最も適しているかを能力・経験・スケジュール等から見極めていくこと、それらをどう配分し役割分担していくかを考えること。これから社会に出て必ずや必要になるであろう体験を文化資源学研究専攻で経験できたことを心から嬉しく思っている。（志田康宏）

このフォーラムのテーマが「地図」に至る前に、「まち歩き」を話し、その前には「記憶と記録」について議論していた。十分に歳を重ねた社会人として私が思い出す「地図」は、生まれた町、育った町、働いた町の「地図」であり、それはいつも少し悲しい気持がともなうことになる。そこに一緒にいた家族がもう誰もいないからである。しかしいま自分が住むまちの地図をみれば、妻と娘の声が聞こえ温かな想像力を感じることができる。つまり、一人の人間にとって「記憶」は「記録」ほど安定してはいない。地図情報といえば、数年前に世界でもっとも危険といわれた南アフリカに旅するかどうか迷っていた時、Google Earth で南アフリカ・ダーバンの街にあるホテルの画像を見た途端に不安が消えたことを思い出す。さて、このフォーラムを終えて、自分の地図観が変化したかどうかはまだわからない。（清水雅行）

これまで漠然と考えていた「地図は今、とてつもなく変化しているのではないか」という意識が、フォーラム終了後には、「地図は、今、過渡期にある」ということを実感するようになった。そして、私たちの生活のあり方が地図の変化に影響を与え、地図の変化が私たちに影響を与えていることもあるのだと理解した。それだけに、百年後に地図はどうなっているのだろうかということ、最近よく考える。今、私たちが古地図を楽しんでいるように、未来の人たちは、今私たちが日常使用している地図を、鑑賞や研究、楽しむのために使ってくれるのだろうか。もし「次回」があるのであれば、私たちは今ある地図をどのように次世代に伝えていくのか、というテーマでも話を伺ってみたいと思った。総じて楽しく、また、いろいろなことを考えさせられるフォーラムであった。ご協力くださったみなさまに改めて感謝申し上げます。（寺尾美保）

「現代美術を形作るシステムの領域横断的な研究がしたい」と研究室の門を叩いた一年前には、よもや地図について議論することになるとは思いもしなかった。フォーラムを終えてからも、私の方向音痴・地図音痴は相変わらずであるが、そもそも、それは要点ではない。「文化資源学フォーラムを企画・運営する」というなんとも漠然とした課題は、言うなれば、新入生にとって本専攻の壮大な実習型オリエンテーションであり、私たちは今回、「文化資源学的」アプローチを探る際の（対象かつ）媒介として地図を選ん

なのである。議論を進める中で途方に暮れることや、実務面で手間取ること
も多々あったが、皆で協力し、また各所からのサポートを頂き、学生の常と
も言える土壇場の猛チャージをかけ開催に漕ぎつけた。そうした経緯もあり、
当日、異なる分野からお集まり頂いた登壇者の方々が私たちの問題意識のも
とで繋がっていく様を示してくれたパネルディスカッションはとりわけ刺激
的であったし、その後の質疑応答では、多種多様な関心を持つ会場の皆様にも
そのことが少なからず共有された事を確認し、感慨も一入であった。今回
のフォーラム準備及び実施に際しお世話になった全ての皆様に改めて御礼申
し上げると共に、大きな学びを得る貴重な機会を頂いたことに感謝したい。
(岡村万里絵)

デジタル化が広く言われるようになって久しいが、私自身はどちらかと言
えばアナログ志向が強い方だと考えている。フォーラム企画当初「地図」と
いう言葉がキーワードとして現れた際も、小学校時代の社会科の授業で配布
された「地図帳」を漠然と思い起こした程度で、「地図」がこれほどまでに
多様な変化を遂げている現状には思いも及ばなかった。昨夏、見知らぬ土地
を旅行することとなり、初めて意識的にデジタル地図を使ってみた。駅名と
行先と交通手段を入力するだけで、最短のルートがすばやく提示され、その
場所の風景を家にいながらにして見られる便利さに驚嘆しつつも、そのルー
ト図をプリントアウトして旅行先に持参した。技術・メディア・使い方等が
多様化する現代の地図事情を、どれが新しくどれが古い、といった二分法
で切り分けるのではなく、さまざまな立場の方々がさまざまな切り口から語
り合う場に参加できたことは、とても刺激的な経験となった。今回のフォー
ラムに関わってくださった全ての方々に、深く感謝したい。(大西美緒)

本年度の文化資源学フォーラムでは、地図そのものだけでなく、地図をと
りまく環境の変化を中心に考えることを通して、ある事象をどのような方向
から論じていくかを皆で考え、作り出していく過程こそ文化資源学らしさな
のではないかと感じた。また、フォーラム実施にあたり多くの方にご協力い
ただき、一つの物事を行うためには、多くの人々の力が必要であることを学ぶ
ことができ、とても貴重な体験であった。ゲストの先生方、インタビューを
受けてくださった方、文化資源学の先生方、そして当日フォーラムに参加し
てくださった方、全ての方に心から感謝したい。(春谷美帆)

第 12 回文化資源学フォーラム
地図×社会×未来
-わたしたちの地図を探しにいこう- 報告書

2013 年 3 月 31 日発行

発行 東京大学大学院 人文社会系研究科 文化資源学研究室
東京都文京区本郷 7-3-1 (〒113-0033)

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/CR/>

執筆・編集 2012 年度「文化資源学フォーラムの企画と実践」履修生
大西美緒、岡村万里絵、志田康宏、清水雅行、寺尾美保
春谷美帆、ペルシチ・マルコス、ボルジギン・シナ

*本報告書の文章・写真の無断転載を禁じます